



TITLE:

サバルタンの公共性とヒンドゥー ・ナショナリズム--スラム街におけ るセワー・バーラティの活動をめ ぐって

AUTHOR(S):

中島, 岳志

CITATION:

中島, 岳志. サバルタンの公共性とヒンドゥー・ナショナリズム--スラム街におけるセワー・バーラティの活動をめぐって. アジア・アフリカ地域研究 2003, 3: 186-223

ISSUE DATE:

2003-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/80017>

RIGHT:

サバルタンの公共性とヒンドゥー・ナショナリズム

— スラム街におけるセワ・バーラティの活動をめぐって —

中 島 岳 志*

The Subaltern Public Sphere and the Hindu Nationalist Movement: The Case of the Activities of Sewa Bharati in a Slum Area of New Delhi, India

NAKAJIMA Takeshi*

The Hindu nationalist movement has been gaining momentum since the 1980s. Led by the Rashtriya Swayamsevak Sangh (RSS), the Hindu nationalist movement has produced various related organizations, such as the Bharatiya Janata Party (BJP) and the Vishwa Hindu Parishad (VHP). These organizations, known generically as Sangh Pariwar, have great influence in contemporary India. The BJP is presently the governing party, and the prime minister, A.B. Vajpayee, was a member of the RSS.

This paper discusses the activities of Sewa Bharti, another Sangh Pariwar organization, in a slum area of New Delhi. Earlier studies have portrayed the Hindu nationalist movement phenomenon of the upper and middle classes. My research shows that this movement also quickly spread among the lower social strata. This paper shows the process by which the Hindu nationalist movement spread among the lower social strata.

は じ め に

「公共圏」・「公共性」をめぐる議論が、近年、盛んに行われている。そこでは、「公共圏」を担う人々を「公民」と位置づけようとする議論と、「市民」と位置づけようとする議論の対立がある。前者は、「公共圏」を国家と結びつけて考える傾向が強く、人々は「国民」としての義務を忠実に果たす、秩序と責任ある「公民」として位置づけられる。一方、後者では、「公共圏」は、国家権力に対して批判的チェックを行う人々の集う場として位置づけられ、国家権力からの距離が強調される。今や「公共圏」や「市民社会」の議論において古典的な存在となっているユルゲン・ハーバーマスの『公共性の構造転換』[ハーバーマス 1973 (1994)]は、

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

後者の立場を代表するものであろう。

しかし、そのような両者の立場は、「公共圏」の内実をめぐっては大きく対立するものの、「公」／「私」という二分法を前提としている点では、同じ立場に立っている。両者の立場とも、「私の領域」とは別に「公の領域」が存在し、個々人は「公共圏」においては私心を超えなければならないことが前提とされる。

ハーバーマスの議論は 1980 年代に入って新たな展開をみせた。1961 年に書かれた『公共性の構造転換』においては、17 世紀後半から 18 世紀にかけて、サロンやコーヒーハウス、読書サークルにおいて形成された「文芸的公共性」を現代の公共圏の原点とし、それが次第に「政治的公共性」へと変化していったことが論じられている。ここでハーバーマスは、自立的個人が公権力に対する批判的討議を行う場所として「市民的公共圏」の重要性を提起したが、80 年代に入って、彼は生活世界におけるコミュニケーション能力と社会統合の力を重要視し、システムによって「植民地化」された生活世界の再生を通じて「自律的公共圏」を形成することを強調する議論へとシフトした。しかし、この議論においては「生活世界」から立ちあがる公共性を重視するものの、依然として「私の領域」と「公の領域」は区別されるべきであるという前提は崩されておらず、それにともなって、宗教や信仰のモメントは、この「自律的公共圏」からは除外され、等閑視されている。さらに、この議論では、近代西洋の主体が前提とされているため、ポスト・コロニアル状況の只中にあるアジア・アフリカの公共性を議論する際には、不十分であることは疑えない。

一方、そのようなポスト・コロニアル社会の問題を考究したパルタ・チャタジーは、インドにおける反植民地主義運動が、「社会的な制度と実践の世界を、物質と精神という二つの領域」に分断したと論じる。そして、インド・ナショナリストたちが「精神の領域」における西洋に対するインドの優位性を説き、植民地勢力に対する抵抗運動を展開した一方で、「物質の領域」における西洋の優位性を認め、西洋近代の政治・経済のシステムを積極的に導入しようとしたと論じた [Chatterjee 1993]。このような「植民地的差異の構造」によって、ヒンドゥー的「ダルマ」の包括性は、「精神の領域」とされた文化・宗教の領域に限定され、政治・経済を中心とした公的領域においては周縁化されていった。これにより、ダルマに基づく「自己の善」と、近代啓蒙主義的価値に基づく「公の善」が分断され、公の領域における倫理の失墜が大きな問題となっていった。

1980 年代以降のインドにおいて、ヒンドゥー・ナショナリズムの潮流が急速に拡大化している。特に RSS（民族奉仕団）を中心としたサング・パリワール (Sangh Pariwar) といわれる RSS グループの存在は、現代インド社会を論じるうえで、欠かすことのできない要素である。このサング・パリワールの諸団体は、市民的公共圏において、ヒンドゥー的「ダルマ」の精神に基づき、さまざまな活動を行っている。なかでもスラム街での医療活動や教育活動、障害

者へのサポート事業、農村の復興事業などは、多方面から高い評価を受けている。これらは、植民地支配によって分断された「自己の善」と「公の善」を再統合し、「公の領域」における「ダルマ」の復興をもたらす社会奉仕活動として評価することができよう。また、その活動を「セワー」(*sewā*) というヒンドゥー的ボランティアリズムの現代的発露として捉え、市民社会の活性化を促す活動として評価することも可能であろう。

しかし、彼らの活動は多くの問題を抱えている。

まず、「自己の善」と「公の善」の一致が、多様な価値をもつ国民を国家の論理に一元的に回収する回路を用意することになる可能性について留意する必要がある。ベラーは『心の習慣』の中で、個々人の信仰に基づく倫理観がナショナリティーと密接不可分な「公の善」へと連続的に拡大化されることの重要性を説いたが [ベラー 1991]、このような論は、逆に国家権力の側が利用した際、国民を自在に動員するためのイデオロギーへと転化する危険性を内包している。

サング・パリワールの活動理念の中には、その活動の趣旨・目的として「国民統合の強化」や「国への奉仕の重要性」を掲げるものが多い。そして、そのような精神こそが「セワー」の精神であると彼らは位置づけている。ここでは、「セワー」という包括的なヒンドゥーのボランティア精神が、「国への奉仕」という狭義のものへと限定されてしまっているのが明白である。これは、RSS という団体名にもはっきりと表れている。RSS の正式名は *Rashtriya Swayamsevak Sangh* であるが、それぞれ *Rashtriya* (*Rāṣṭrīya*) は「ネーション」、*Swayamsevak* (*Swayamsevak*) は「自ら奉仕する者 (男性)」、*Sangh* (*Saṅgh*) は「組織」を指すヒンディー語である。つまり、RSS という団体名は「ネーションのために自ら奉仕する者 (男性) の組織」という意味であり、「セワー」の概念が「ネーションへの奉仕」という側面に限定され、矮小化されているのがよくわかる。

また、本来、包括的な奉仕の精神である「セワー」の概念は「自己の欲望の抑制」という観念と密接につながっているものであるが、ヒンドゥー・ナショナリストの唱える「セワー」の概念においては、個人の欲望を抑制するのではなく、それを国家の欲望と一致させることによって個人の欲望を肯定し、それを満たそうとする志向性が強い。

彼らの主張する「セワー」の概念は、国家の利益になることを「奉仕」の核心と位置づけることによって、逆に国家の利益と必ずしも結びつかない (場合によってはそれと相反する) ような社会奉仕活動を「セワー」とはみなさないという国家中心主義的なものになっている。結局、サング・パリワールの活動は、「セワー」というヒンドゥー的ボランティアリズムを、国家にとって都合のいい「国民規範」へと読みかえうえに成り立っており、包括的な「ダルマ」の精神を矮小化するものになってしまっている [中島 2002a; 2002b]。

このように、サング・パリワールの諸団体の活動は、公共圏において「ダルマ」の精神を復

興しようとする運動として捉えることができる一方で、その「ダルマ」を「国民規範」へと矮小化し、国民を国家の論理に一元的に回収しようとする活動となっている側面も強く有している。また、彼らの活動は公共圏におけるヒンドゥーのヘゲモニーの強化を志向しており、ムスリムやクリスチャンへの抑圧や暴力を生み出すことが頻繁にある。彼らの活動が、ヒンドゥー中心主義的であり、他者への抑圧や暴力に繋がる側面があることも、大きな問題として指摘しなければならない。

さらに、サング・パリワールの活動は、民衆を政治的に動員するための手段となっている側面も強い。サング・パリワールの活動に参加する人たちは、時にはヒンドゥー・ナショナリストの政治的なデモや集会に動員され、また時には、サング・パリワールのひとつである BJP (Bhartiya Janata Party: インド人民党) の選挙の際の集票ネットワークとして機能している。サング・パリワール諸団体の活動家たちが、医療・教育・福祉事業などさまざまな活動を通じて、具体的な利益を民衆に分配する代わりに、政治的動員が可能な人的資源を確保しようとしている側面は大いにある。

しかし、そこでサング・パリワールの活動に参加する民衆を、活動家によって分配される利益に一元的に回収される客体として捉えることは間違いである。民衆は各自の多元的な価値観や自らの置かれた生活状況の中で、それぞれ柔軟でしたたかな判断を成し、さまざまな取捨選択を行っている。ここでは、一元的に動員される訳でもなく、近代的理性に基づく合理的主体として活動に参加する訳でもない民衆のエージェンシー（行為主体）に注目する必要がある。

民衆は、時にサング・パリワールの活動を巧みに利用し、戦略的に適応してみせる。このような姿を、民衆の戦略的日常実践と捉え、その「たくましさ」から、彼らの「しなやかな抵抗（ソフトレジスタンス）」や「権力の飼い慣らし」という作用を読み取ることもできよう。民衆の多くは、権力に一元的に回収されるのではなく、逆にそれに対して真っ向から対抗し闘い続ける訳でもない。彼らは、巧みにその権力をかいくぐりながら、したたかに日常を生き抜いている。この姿の中に、民衆のエージェンシーを見出すことは重要である。

しかし、民衆のエージェンシーを世俗的な事象に限定する議論に陥れば、彼らの「生活世界」を包括的に捉えることが不可能になる。ここでは、同時に、彼らの間に存在する「ヒンドゥー覚醒」のモメントや「ヒンドゥー復興」の動きそのものにも注目する必要がある〔中島 2002a〕。彼らは、世俗的利益を獲得するために、さまざまな日常実践を行い生活しているが、そこには同時に重層的な人間関係の中で構築される存在論的問い¹⁾が存在する。そして、さら

1) 田辺明生は「自己とは何ぞや」「いかに生きるか」という自覚的な存在論的問いこそ、人間にとっての普遍的問題であり、地域研究においては「地域の固有論理を人間の存在可能性という普遍的な哲学的問いとの関連で捉える視点」こそが重要であると主張している〔田辺 2001: 130〕。本稿では、このような田辺の主張に触発され、その課題をデリーのスラム街という具体的な場におけるフィールドワークから明示することを試みた。

にその背後には、神という唯一絶対的なものを想定することによって自己の存在を反照的に見つめる信仰の世界が広がっている。²⁾

彼らは所与の関係性や共同性を引き受けつつ、その信仰を通じて、「よく生きること」や「正しく生きること」を追求している [Tanabe 2002]。このような民衆の信仰に基づく存在論的希求を等閑視する議論は、彼らのエージェンシーを包括的に捉えることにはならない。

ただし、民衆のエージェンシーを手放しに評価する議論に陥っては、ヒンドゥー・ナショナリズム運動の問題の所在が曖昧になる。この民衆のエージェンシーが、他者との差異性を固定化し、自己の物質的・権力的欲望を達成する手段となってしまう側面も、同時に指摘しなければならない。

本稿では、上で述べたようなヒンドゥー・ナショナリストの活動の可能性と問題点を明確にするために、サング・パリワールのひとつであるセワー・バーラティ (*Sewā Bhārati*: 「インドの奉仕」の意) の活動を紹介しながら、分析を進めていく。特に本稿では、このセワー・バーラティのスラム街における活動に注目し、議論を進める。

ここで注目しなければならない点は、スラム街の住民の多くが、伝統的共同体から切り離され、都市へ流入してきた人々であるという点である。しかも、その住民の出身地やカーストは千差万別であり、伝統的共同体においてみられるような職分制³⁾を通じた有機的社会を構築することが困難な環境にある。また、彼らは、都市の上層・中間層のような経済的豊かさを享受し、それによってアイデンティティを満たすことのできるような状況にもない。さらに、スラムの住民たちは、自分たちの生活の基盤を守るために、「いかにして公権力からスラムを破壊されないようにするか」という課題を、常に緊張感を持って共有せざるをえない。彼らはバラバラの個人でいることを状況的に許されず、スラム内における共同性と連帯性を保ちつづければ「生きる」ことができない。

ここでは、伝統的共同体とは異なる新たな状況の中から生まれるサバルタンの公共性⁴⁾に注

2) 人間は存在論的問いを追及する時、上田閑照が指摘するように「世界の内にありつつ、同時に世界を越えつつむ『限りない開け』の内にあるということ」に気づかざるを得ない [上田 2000: 20]。このような「世界」を超越し、かつ包摂する絶対レベルを想定したうえで、「私の存在とは何か」という究極的な存在論的問いを発した時、信仰の問題をその枠の外に追いやることはできない。ここでは、有限な「この世界」という相対レベルにおける諸価値の差異性を承認することとともに、無限の彼方という絶対レベルにおける諸価値の同一性を認識することが重要である。自己の存在根拠を探究する際、「この世界」を超越し、かつそれを包摂する彼方を想定せざるをえない。さらに、この彼方における超越的「唯一存在」としての真理（これには「神」や「梵」、「虚空」などさまざまな呼び方がある）は、「この世界」の多なる事物に内在し偏在する [上田 2000；田辺 2001]。このような「多一論」・「多一神教」の世界観は、すべての宗教に共通する普遍的存立根拠である [落合 2001]。

3) 職分制（職位分業分配制）とは、世襲的な職位権を得ることによって、「その職位に付随するさまざまな権利・義務および社会的地位の総体を受け入れ」、それによって個々人の「社会的な人格あるいはアイデンティティ」が規定される制度のことを指す [田辺 1997]。

目し、そこにおいて「正しく生きる」ことや「よく生きること」がいかにして追求されようとしているのかということを見る必要がある。そして、このような状況に置かれたスラム街にヒンドゥー・ナショナリストの活動が流入してくることによって、いかなる新たな社会の活性化が起こり、いかなる新たな問題が生じているのかということ論じる必要がある。

ヒンドゥー・ナショナリズムに関する先行研究では、この運動を担う層を上層・中間層や上位カーストに限定するものが大半で、下層民の社会におけるヒンドゥー・ナショナリズム運動の拡大化現象は、等閑視されてきた。本稿では、下層社会におけるヒンドゥー・ナショナリズム運動の拡大化の具体的な事例を取り上げ、それを分析することによってこれまでの先行研究の欠落部分を埋めることを目的とする。

以下では、上記のような問題をニューデリー K 町のスラム街におけるセワー・バーラティの活動に関するフィールドワークから明らかにしていきたい。

1. 社会奉仕活動と国民統合

1.1 セワー・バーラティの活動概要

この章では、まず、セワー・バーラティの概要と理念を公式的イデオロギーに沿ってみていくことにする。

セワー・バーラティという組織は、1979 年にデリーで設立された。創設者は第 3 代 RSS 総裁の B. S. デーオラス (Bala Saheb Deoras) である。彼らは主に北インドの都市で、スラム街をはじめとした経済的に貧しい人々の住む地域においてさまざまな NPO 活動を行っている。彼らの刊行する年次報告書によると、2002 年現在、首都デリーにおける事業の総数は 1,517 あり、約 1,600 人の活動家がそれらの奉仕活動に従事しているという [Sewa Bharti 2002]。彼らはデリーを 12 の管轄区に分類しているが、中でも多くの事業が集中しているのが北西部と北東部の比較的スラムの多い地域である。

4) 「サバルタンの公共性」という用語を用いて議論を進めるのは、南アジアにおける公共性の問題を詳細に論じた栗屋 [2002] の、以下のような指摘に触発され、それに応えることを本稿の重要な課題としたためである。

ここで取り上げた (南アジアにおける「公共圏」「市民社会」をめぐる一引用者) 研究はもっぱらエリート・レヴェルの動向を対象とするものであり、サバルタン研究グループがエリートと非エリート (サバルタン) を峻別した視点と重なっている。とすれば、「公共圏」「市民社会」をめぐる議論において、サバルタン研究 (とくに初期の研究) が蓄積してきた非エリート層の価値観、行動形態などに関する議論との生産的な会話がさらに求められているといえよう [栗屋 2002: 161]。

ここで栗屋が的確に指摘しているとおり、従来の南アジアの公共圏に関する研究では、エリートレヴェルを対象としたものが大半を占めるために、そこからこぼれ落ちる非エリート (サバルタン) の価値観や行動形態から立ち上がってくる「公共圏」や「公共性」は等閑視されてきた。本稿は、エリートとは大きく異なる都市のスラム街に住む下層民の価値観や行動形態から「公共圏」「公共性」の問題を議論するため、「サバルタンの公共性」という用語を創出し使用した。なおこの「サバルタンの公共性」という概念については、「おわりに」で、本論の議論を総括したうえで再び論じる。

以下では、2002 年現在、彼らがデリーにおいて行っている事業を概観する。なお、以下にあげる事業名やその分類は、彼らの発行するパンフレット [Sewa Bharti 2000a] に基づく。また、各事業の具体的な内容については、パンフレット [Sewa Bharti 2000a; 2000b]・年次報告書 [Sewa Bharti 2002]・現場での掲示物・著者のフィールドワークを総合したものの要点のみを簡潔に記す。

(1) バール・バーリー (*Bāl Bārī*:「少年・少女」の意味)

スラム街などの貧困地区において、教育を受けることのできない子供たち（主に3歳以上の幼児から5年生の生徒）に対して行われている教育事業。具体的な例は次章以降で詳しく論じる。

(2) コーチング・センター (Coaching Centres)

一般学校に通う6年生から12年生までの生徒に対する課外教育、およびモラル教育のプロジェクト。塾や予備校に相当するもの。

(3) セワー・ダーム (*Sewā Dhām*)

1978 年設立。デリー東北部にある全寮制の学校。SC (指定カースト)、ST (指定部族)、OBC (その他後進カースト)、その他貧しい家庭の子供たちを全国から集め教育を行っている。この学校は広大な敷地を有しており、建物の中にはコンピューター教室や物理・化学の実験室、図書館など充実した設備が整えられている。また、校内にヒンドゥー寺院が併設されており、毎日のプージャ（祈りの儀礼）を含めたヒンドゥー教育が行われていることが大きな特長である。2002 年2月の時点での生徒数は284人で、インド国内の21の州から集まった子供たちが寄宿生活をしている。最も多いのはジャールカンド州の48人で、次いでデリーの37人、アルナーチャル・プラデーシュ州の30人、ハリアナ州の23人、ビハール州の22人、マッディヤ・プラデーシュ州の20人などがそれに続く。また、284人の内、STの子供が123人、SCの子供が53人、OBCの子供が78人、その他貧しい家庭の子供が30人である。

(4) チャートウラーワース (*Chātrāwās*)

上記のセワー・ダームと同様の学校で、デリー西北部にある。ここはセワー・ダームよりも規模が小さく2002年2月の時点で40人の生徒が寮生活をしている。他にも10人の活動家が生活を共にしている。生徒のほとんどはデリーの貧しい家庭の子供たちで、大半がSCである。この学校は一般科目を教えるよりも、ヒンドゥー教育と具体的な職業訓練のための技術教育が行われていることが特徴である。校内にはタイプライターの訓練所やコンピュータールームがあり、そこで技術を習得し就職先を探す。

(5) 職業訓練 (Vocational Training)

スラムなどに住む貧しい家庭の若者に技術教育を行うプロジェクト。男子に電気製品の修理

や配線の技術を教えることを中心としている。デリー各地に拠点がある。

(6) タイプと速記のトレーニング (Type and Shorthand Training)

貧しい家庭の若者にタイプと速記の技術を教えるプロジェクト。デリー各地に拠点がある。

(7) 裁縫のトレーニング (Cutting and Tailoring)

貧しい家庭の若い女性に裁縫の技術を教えるプロジェクト。デリー各地に拠点がある。

(8) 大人への読み書き教育 (Adult Education/Literacy)

スラム街などに住む子供を持つ母親に、文字の読み書きや算数を教えるプロジェクト。

(9) ストリート・チルドレン・プロジェクト (Street Children Project)

デリー東北部のスラム街で行われているプロジェクトで、親のいない子供たちがストリートチルドレンになることを防ぐために、その子供たちをサポートする事業を行っている。具体的には学校を作り、そこで初等教育や技術教育を行い、食事を提供している。現在、ここの先生は5人で、生徒数は約300人である。建物の中には6つ部屋があり、初等教育を行う教室が2部屋、電気関係の技術教育を行う教室が1部屋、手工芸品を作る技術を教える教室が1部屋、事務所が2部屋ある。プロジェクトは現在のところこの1ヵ所のみである。

(10) マートゥリ・チャーヤ (Mātri Chāyā)

身寄りのない乳幼児（0歳から1歳）を引き受けて、その養子縁組を行う施設。看護婦が常駐し、その世話をを行う。2002年2月の時点で13人の赤ちゃん（0歳児ばかり）が収容されている。この事業は現在のところ1ヵ所のみである。

(11) 医療事業 (Medicare)

スラムをはじめとする地域を、医療器具を搭載した車で廻り、健康診断や治療を行う事業。一部では常設の診療所を開設している。

(12) ハンセン病患者へのケア (Serving the Lepers)

ハンセン病患者に対する医療的・心理学的・教育的ケアを行う事業。

(13) サンスカール・ラト (Saṃskār Rath: 「究極の（完全な）乗り物」 という意味)

自動車の後部に大きなスクリーンをつけ貧困地域に赴き、ヒンドゥーの儀礼やナショナリズムを高揚させるフィルム、健康・衛生意識を高めるためのビデオなどを上映して廻る事業。

(14) バジャン・マンダル (Bhajan Maṇḍal: 「賛歌サークル」 の意味)

貧困地域におけるモラルを高めるための事業。ヒンドゥーの音楽隊を連れて貧困地域に赴き、そこで演奏会をすることによってヒンドゥーとしての意識を高めることを目的とする。

(15) 反ドラッグ事業 (De-Addiction)

酒・タバコ・ドラッグに反対するプロジェクト。具体的には、酒を飲まないことやドラッグを使わないことを神に誓約する儀式を行っている。

1.2 セワー・バーラティの理念

さて、前節にあげたような多岐にわたる事業を、セワー・バーラティは如何なるコンセプトのもとに行っているのでしょうか。

まず、セワー・バーラティにおいて強調されることは、下層民の社会的・経済的地位が向上し、彼らが自立することができるように導くことである。彼らの発行するパンフレットでは、そのようなことが次のように掲げられている。

セワー・バーラティの目指していることは、恵まれない人々の地域において、彼らの生活のあらゆる側面における自立を築きあげることである [Sewa Bharti 2000a]。

そして、彼らは、セワー・バーラティが社会奉仕活動を通じて、恵まれない人々が経済的に自立することによって、カーストや階級の差がなくなり、社会的調和が生まれるということを強調する。

その（セワー・バーラティの活動の）最終的な目的は、恵まれない階層の人々への奉仕活動を通じて、カーストも階級も存在しない社会を構築することにある。セワー・バーラティは、これまでにさまざまな教育活動や文化的・宗教的事業を通じて、スラムや貧困地域における社会調和の雰囲気を作り上げることに成功してきた [Sewa Bharti 2000a]（なおカッコ内の補足文は引用者による。以下も同様）。

さらに、彼らは自分たちが都市の貧困地域における社会調和を築きあげることに「成功してきた」のは、「人に対する奉仕は神に対する奉仕」というモットーのもとに活動してきたからであると言い [Sewa Bharti 2000a]、続けて次のように主張している。

セワー・バーラティは、（このようなモットーに基づいた活動を行ってきたことにより）彼ら（恵まれない人々）を、国民としてのプライド、モラルを尊ぶ精神、博愛主義的価値によって包み込むことに成功してきた [Sewa Bharti 2000a]。

ここでは「人に対する奉仕は神に対する奉仕」というモットーに基づく活動によって「モラルを尊ぶ精神」「博愛主義的価値」を広めたということと同列に「国民としてのプライド」を高めたということが述べられている点に注目する必要がある。

彼らは、このような国民意識を醸成することに、活動の重きを置いている。2002 年現在のセワー・バーラティの事務局長 (secretary)⁹⁾ である R. K. シャルマ (R.K. Sharma)⁹⁾ は、2002 年

11 月 23 日にセワー・バーラティ本部において著者が行ったインタビューの中で、次のように述べた。

セワー・バーラティの活動によって、恵まれない人々の住む地域の社会統合が成し遂げられ、それによって国民意識が強固なものとなり、インドの国民統合が進むことが重要なのです。

ここで、彼は「社会統合」を目指すセワー・バーラティの活動の背景に、「国民統合」を成し遂げるという大きな目的があることを述べている。さらに、彼はこれに続けて次のように語った。

低い地位にある人々に対して奉仕し、彼らの地位を上げることがネーションの力の増大につながるのです。

ここでは、セワー・バーラティの活動が、国力の増大化という目的をもって行われているということをみてとることができる。

セワー・バーラティのイデオログたちの活動構想においては、宗教的ボランティアに基づく「セワー」（奉仕）の精神を、国民統合を成し遂げ国力の増進を図るというナショナリズムへと誘導することが強く意図されている。RSS の理念においては、「全宇宙の根源にある真理」を意味しさらに「宗教」や「善」「規範」「属性」などの広範な意味を含む「ダルマ」の概念が、インドという国民国家のために献身的に奉仕すべきという「国民規範」へと矮小化されることが頻繁にあるが〔中島 2002b〕、ここでもヒンドゥー的ボランティアの精神が、このような国民規範へと巧みに転化され、その構成要素の一部として組み込まれていることをみてとることができる。

ただし、重要なことは、このような理念はあくまでもセワー・バーラティの幹部の本部事務所における机上のイデオロギーであり、末端の具体的な活動そのものではないという点である。ここでは「イデオログの意図」・「現場の活動家」・「その活動を受容するスラムなどの住民」のそれぞれの主体、およびそれらの関係性に注目し、その総体としてセワー・バーラティ

5) セワー・バーラティにおけるこの「事務局長」というポストは、総裁、副総裁に次ぐ上位のポストである。

6) なお、彼は 1962 年から 68 年まで RSS のプラチャールク（常勤活動家）であった人物で、その後インドにおける代表的な銀行である State Bank of India に勤め、重役まで出世し、1999 年に引退したのち、このセワー・バーラティの事務局長に就任した。

の活動を位置づけることが重要である。⁷⁾

次章以下では、具体的にニューデリー K 町のスラム街におけるセワー・バーラティの活動に注目し、その活動とスラムの住民との複雑な関係性に注目しながら、その可能性と問題点をみていく。

2. スラム街におけるヒンドゥー・ナショナリストの活動

2.1 ニューデリー K 町のスラム街

まずは、ここで取り上げるニューデリー K 町のスラム街の概況をみてみよう。このスラム街がある K 町は、ニューデリー中心地から数キロ離れた北西部に位置し、低所得層が多く住む比較的人口密度の高い地域である。このスラムは、K 町の中心を東西に走る交通量の非常に多い幹線道路に面して広がっている。この場所は、地図上はバスターミナルが存在することになっているが、バスターミナルとして使用された形跡は、現在全くない。ただ、このスラムが面する大通り上には、現在でも長距離バスのチケットを販売する小さなブースがあり、深夜には何台かの長距離バスがここを經由して客を乗せ、各地に向けて発進している。かつてはそのような長距離バスのターミナルとしてこの場所が利用されていた可能性はあるが、それについては現在、はっきりとは確認できない。ここは、南北 140 メートル・東西 65 メートルほどの区画であるが、西から東にかけて上り坂になっており、高低差が 4 メートル以上もある。このような土地がバスターミナルとして使用されていたとはなかなか想像し難い。

2002 年現在、ここのスラムの南東隣にはゴミの集積所がある。そして、この集積所に隣接するスラムの東半分には、ゴミの収集・分別を仕事とする人々が多く住んでおり、その作業場が点在している。住民の話と周囲の状況から考えて、このスラムはこの場所に集められたゴミの収集・分別を仕事とする人が集積所の脇に不法定住しはじめ、それが拡大して現在のようなスラムが形成されたとみてよいだろう。

このスラムの戸数は、2002 年 11 月現在、952 軒である。ただし、そのうち 35 軒が商店やゴミの分別作業所・倉庫などとしてのみ使用されており、住居としては使われていない。⁸⁾ 1 軒の広さはせいぜい 3 メートル（幅）×3 メートル（奥行き）ほどのもので、そこに概ね 5 人から 8 人が生活している。無作為に 30 軒をピックアップし、その人口を調査したところ、その合計が 202 人であった。この数値に基づくと 1 軒につき、平均 6.73 人が住んでいることになる。これらの数値を総合して単純計算すると、このスラムの人口は 6,171.41 人となる。⁹⁾ これはデリー

7) このような見方については、足立明のアクター・ネットワーク論 [足立 2001] が参考になる。

8) これらの数値は、著者が行った 2002 年 10 月から 12 月にかけての調査に基づく。

9) $(952 - 35) \times 6.73 = 6171.41$ 。これは「(全戸数 - 非住居戸数) × 1 軒あたりの平均居住者数」を計算したものである。

に存在するスラムの中でも、かなり大きな規模の部類に入るであろう。

ここに住む人のほとんどはデリー出身ではなく地方出身であり、その出身地はウッタル・プラデーシュ州（以下 UP 州と略記する）が最も多く、次いでハリアナ州が多い。他にもビハール州やマハーラーシュトラ州、ラージャスターン州、南インドのタミルナード州などから出てきた人が何名かいる。住民の多くは村の出身で、農家の長男以外の男性・女性が、家族単位で出てきたケースが多い。私の調査では UP 州のバレイリー近郊の農村から出てきた人が多く見受けられた。

また、この住民のうち約半数が SC（指定カースト）の人である。¹⁰⁾ スラム内でゴミの収集・分別の仕事に携わっている人は、この SC の人々である。彼らは主にスラムの東側に多く住んでいるが、カーストによる特別な住み分けはこのスラム内では、はっきりとした形ではみられない。

また、ここにはムスリムの住居が 21 軒ある。これは全住居数のうちの 2.29%にあたる。彼らの住居はスラムの南東部に多いが、他の場所にも点在しており、はっきりとした住み分けはここでもみられない。ヒンドゥーとムスリムの間のスラム内での人間関係は基本的には良好で、お互いに深いつながりがある。日常的な関係における摩擦は、調査の範囲ではほとんどみられなかった。ただし、近年、ヒンドゥー・ナショナリズムの浸透とともに、ヒンドゥーの住民の会話の中に、ムスリム一般に対する不信感を示す語りがみられるようになっており、問題が生じつつある。このことは後に詳細に述べる。

この住民がこの町にやってきた時期は、1980 年代半ばから 90 年代初頭にかけてが最も多く、この頃に親類や知人を頼りに、まとまってデリーに出てきた人たちがここに住みつき、現在の規模になったようである。今では、このスラムで生まれ育った若者が増えており、一番上の年代はすでに 20 代前半になっている。

ここに住む人の現在の職業は千差万別であるが、最も多いのが、先にあげたゴミの集積場からの廃品回収とその分別を仕事とする人々である。他にも路上で揚げ物などの軽食を売る人、野菜・果物を売る人、靴磨きをする人、サイクルリキシャーの運転手、花輪を作る人、ぬいぐるみの綿詰めをする人、道路工事や建設現場で働く人、ポーター、工場労働者など、自己資本や技術をほとんど必要としない仕事に従事するものが多い。しかし、なかには、手に職をつけて、電気製品の修理や配線工事を行う業社に勤める者もあり、さらに、転職を繰り返すうちに出世し、会社勤めをしはじめた者までいる。彼などは、スーツを着用し、さらにバイクに乗って毎朝このスラムから出勤している。また、一部の資金的余裕のある家庭では、子供をスラム

10) このスラムにおいて、無作為に選んだ 200 人に聞き取りを行った結果に基づく。調査の結果は 200 人中 106 人が「自分は SC である」と答えた。

の外の公立（中には私立）の学校に通わせるケースがある。スラムからきれいな制服をきた子供たちが登校している様子は、スラムに対して抱いている多くの人々の先入観からかけ離れた情景であろう。また、このスラムの中にはテレビやオーディオ機器、冷蔵庫などを所有している家は何軒もあり、そこでは衛星放送を楽しみ、最新のヒットソングを大音響で聞いている人たちもいる。

このスラムには、日用雑貨や軽食、野菜、肉などを売る店が合計で 15 軒ほどあり、簡単な診断と薬の処方をする診察所も存在する。ただし、その診察所を営業しているのは医学の専門的な教育を受けた者ではなく、多少の薬に関する知識をもっているだけの素人であり、簡単な薬局といった方が実態に即しているだろう。電気は盗電によって概ね全家庭に引かれており、水道水も共同ではあるが確保されている。スラムが形成されはじめてからすでにある程度の年数が経過しているため、生活のインフラストラクチャーは概ね整えられているといつてよい。しかし、生活廃水の処理などは万全ではなく、今でも衛生面において多くの問題を抱えている。数年前までは、住民の多くが排泄をスラムの脇の公道で行っていたため、周辺社会を含めた衛生問題が深刻となり、行政の側がスラムの西端の道路沿いに大型の公衆トイレを建設した。これにはセワー・パーラティの活動家の働きかけが大きかったようである。

このスラム内にはヒンドゥー寺院が 2 つ存在する。1 つは住民の往来が頻繁にあるスラムのほぼ中心地に建てられている。この寺院はシヴァ寺院で、1992 年 7 月に建立された。現在は NR というヒンドゥー僧が常駐し、毎日のプージャを執り行っている。

この僧侶は、1967 年生まれで、UP 州バレイリー出身である。彼の語りによれば、彼はこの寺院が建立されて間もなくここに常駐するようになり、ちょうどその頃に VHP (Vishwa Hindu Parishad: 世界ヒンドゥー協会)¹¹⁾ のメンバーになったという。この寺院は VHP の力を背景として建てられ、彼も VHP のメンバーになったことによって、この寺院に住み込むことになったという。

また、このスラムにはもう 1 つ寺院がある。これはスラムのほぼ北端に建てられた祠で、僧侶の NR がここの管理も行っている。この僧侶と周囲の住民の話によれば、この寺院も上記のシヴァ寺院と同時期に、VHP の力によって建設されたようである。この寺院には「ジャンデーワリー・マーン」(*Jhaṇḍewālī Mān*; 「母なるジャンデーワラー」という意味) という女神が祀られている。この女神は、ニューデリーの北西部にあるジャンデーワラー・デーヴィー寺院 (*Jhaṇḍewālā Dēvī Mandir*) に祀られており、周辺の地域一帯の地母神である。

11) VHP は 1964 年に設立されたヒンドゥー聖職者の組織で、サング・パリワールの中で多大なる影響力をもっている。一般にはアヨーディヤーにおけるラーム寺院建設運動を先頭にたって推し進める過激派集団として知られる。

このジャンデーワラー・デーヴィー寺院は、デリーではつとに知られた寺院で、デリー市内だけでなく北インド各地から参詣者が連日やってくる。この寺院は、1880年にバドゥリー・バガット (Badri Bagat) という人物がこの地に洞穴を見つけ、そこに足を踏み入れたところ、中の岩のひとつに女神が現われているのを発見し、その真上の地上にその女神の像を安置した祠を造ったことから始まったといわれる。¹²⁾ この女神はドゥルガーの化身とされ、時と共に「ジャンデーワラー・マーン」と呼ばれるようになったという。この「ジャンデーワラー」という語は、「ジャンダー」(*Jhāṇḍā*:「旗」の意)という語と「ワラー」(*wālī*:「～の者」を意味する *wālā* の女性形)という語の結合語で、「旗を持つ者」を意味する。そのため、寺院の最も高い場所にたなびく大きな赤い旗が、この寺院を象徴するものとなっている。また、この寺院が存在する一帯の地域は、この女神の名前を採って「ジャンデーワラー」と呼ばれ、行政上の正式な地名となっている。現在、この寺院は広い敷地を有するデリー有数の規模の寺院となっており、ジャンデーワラー・マーンの像が祀られている建物の地下には、今でも「女神の岩」があり、地下に下りてそれに礼拝することが可能となっている。

そして、この寺院と密接な関係があるのが、RSS をはじめとしたサング・パリワールの諸団体である。RSS はこの寺院のすぐ傍に本部を構えており、その周辺にはサング・パリワールの諸団体の事務所が軒を連ねている。RSS はデリーに本部を構える際、この寺院の傍を意図的に選んだという。¹³⁾ RSS はこの寺院に多大なる資金的援助をしており、ここの僧侶と RSS の幹部は密接な関係にある。RSS で執り行われる宗教儀礼にはここの僧侶が呼ばれ、司祭を務めることが多い。2002年11月4日に RSS 本部の敷地内で行われたディワリー (灯明祭) を祝うプージャには、この寺院から僧侶がやって来て司祭を務めた。また、インドにおいて寺院を運営する際、各州の団体登録法 (Society Registration Act) に基づいてその運営組織を創設し、一定数のメンバーを登録する必要があるが、この寺院の場合、Badri Bhagat Jhandewala Temple Society というのがこの運営組織にあたり、その登録メンバーにサング・パリワールの有力なメンバーが軒並み名を連ねている。ちなみに、現在のこの組織の事務局長は、元 RSS のプラチャーラクの O. P. シャルマ (O.P. Sharma) であり、他の主要なポストのほとんどが RSS 関係者で占められている。

また、RSS の本部を訪れたメンバーの多くはこの寺に立ち寄って参拝し、僧侶や寺院関係者と顔見知りになっている。さらに、この寺院の敷地内に建てられた建物には、VHP の事務所

12) この寺院の由来に関しては、この寺院の僧侶であるシュリニワス・ガイロラ (Srinivas Gairola)、寺院の事務局長の O. P. シャルマ (O.P. Sharma)、エデュケイト・オフィサー (Educate Officer) の R. P. ヴァーサン (R.P. Vasan) への聞き取り調査に基づく。なお、それぞれの肩書きは2002年11月現在のものである。

13) RSS 本部の複数の幹部への聞き取り調査に基づく。

が存在する。また寺院の門の正面で、この寺院と隣接する建物はセワー・バーラティの本部として使用されている。

このようなサング・パリワールと非常に関係の深い女神の祠が VHP の手によってこのスラム内に造られたということは、土地の女神への信仰という要素以上に、大きな政治的意図が背景にあるとみる方が自然であろう。

その他に、このスラムの中で重要なものは、大通りに面したスラムのメインの入り口から入ってすぐの広場に建てられているアンベードカル (B.K. Ambedkar) のモニュメントである。また、このモニュメントのすぐ傍には、アンベードカルの名を冠する無料の宿泊施設がある。それぞれの定礎には、両者とも 1994 年にアンベードカルの日を記念して立てられた旨が記されており、CL という建立者の名前が刻まれている。

この CL という人物は、このスラムに長年住んでいた (2001 年没) ダリト (不可触民) で、「サムター・セーニク・ダル」(Samta Senik Dal) のメンバーであった。この「サムター・セーニク・ダル」は、1924 年 9 月にアンベードカルが設立したダリト解放運動をすすめる組織で、現在に至るまでそのアンベードカル思想に基づき活発な活動を行っている。この組織は、デリーに「アンベードカル・ババン」という大きな敷地を有する事務所を構えており、中には宿泊施設や図書館、講堂、タイピングを教える教室などがある。彼らは現在、インド各地でダリトに対する仏教への改宗運動を積極的に行っており、多くのダリト出身の仏教僧がその活動に従事している。他にも学校の設立や宿泊施設の建設など、ダリトに対する社会奉仕活動を積極的に行っており、広範な注目を集めている。

CL はこの組織の熱心なメンバーで、その理念に基づいて、アンベードカルの日を記念するモニュメントと無料の宿泊施設を造ったという。¹⁴⁾ この人物の活動についてはこのスラムを考える際に非常に重要であるので、後で詳細に論じる。

また、このアンベードカルの日を記念する像の脇にある小さな広場では、政党の演説会や各種の団体の PR 活動が頻繁に行われている。ただし、普段はゴミの中から集められた鉄屑の分別作業を行う場所として利用されている。このスラムには自治会のようなものが存在するが、この広場を使用するには、その自治会での承認が必要である。この自治会の長は CL の兄で、彼はこのスラムの形成当初からここに住む最古参のメンバーである。また、彼は CL と同様、サムター・セーニク・ダルのメンバーでもある。

そして、このスラムにおいて非常に重要な役割を担っているものが、セワー・バーラティの建てた学校である。次節以降では、この学校の概況と活動を詳しくみていくことにする。

14) この CL に関することは、現在 (2002 年 11 月) でもスラムに住む彼の遺族への聞き取り調査に基づく。

2.2 セワー・バーラティの教育活動

このスラムにあるセワー・バーラティの学校は、1989年に数名のRSSのプラチャーラクの尽力により設立された。この学校ができる以前は、スラム内に教育施設が存在せず、一部の子供以外は全く教育の機会がなかったという。

この学校の運営にあたって最も重要なのがRCという人物である。彼は1990年以降、この学校内に住みつけ、現在（2002年11月）に至るまでこの学校の運営・管理を行っている。彼は1971年、ビハール州スパウル県の農家の三男として生まれ、子供時代をその村で過ごしたという。彼は、尊敬する小学生時代の担任の先生がRSSの熱心なメンバーであったことからRSSのシャーカー¹⁵⁾（毎日のトレーニング）に参加しはじめ、時間の経過とともに、自身も熱心なメンバーになっていったという。彼の両親や兄はRSSのメンバーではない。彼は1987年に村を出て近くの町に移り、そこでRSSのプラチャーラクになった。さらに、1990年にデリーに出てきて、現在のスラムの学校を管理・運営することになったという。彼は、当初この学校の先生も兼任していたが、生徒数が増えるにしたがって運営の資金面で問題が生じはじめ、1997年頃から友人の会社で働きはじめた。RSSでは、プラチャーラクは仕事をもってはならず、彼はその仕事を始めるにあたってプラチャーラクを辞めざるをえなかった。彼は、今後もこの学校の管理・運営に生涯を捧げる覚悟のようで、妻帯も絶対にしないという。彼の生活は非常に質素で、この学校の中にある彼の部屋にはベッドと食器などの必要最小限の家財道具以外には何も無い。また、彼は完全な菜食主義者（ピュアー・ベジタリアン）である。

この学校には、約6メートル四方の教室が1つあるだけで、そこには生徒のための椅子や机はない。生徒は床に敷かれた布の上にじかに座り勉強をする。教室の壁には、至る所にサンスクリット語のマントラや、「インドはヒンドゥー国家である」(*Bhārat Hindū Rāṣṭra Hai*)¹⁶⁾というようなヒンディー語のスローガンが書かれている。また目立つ場所には、RSSの創設者のヘードゲーワールや2代目総裁のゴールワルカル¹⁶⁾の肖像画、「バーラト・マター」(*Bhārat Mātā*)¹⁶⁾のポスターなどが掲げられている。その他にも、シヴァージー (*Shivaji*) やアンベードカル¹⁶⁾の肖像画などが掲げられている。セワー・バーラティでは、この学校だけでなく他の活動の場所でも、アンベードカル¹⁶⁾の肖像画が掲げられていることが多い。このアンベードカルは、独立運動期から一貫してダリトの解放運動を行った人物で、晩年にはヒンドゥーを捨て仏教に改宗した人物である。現在のダリト運動においてもこのアンベードカル¹⁶⁾の影響力は絶大で、多くのダリトの人々から強く尊敬されている。このような人物の肖像画を各所に掲げているのは、セ

15) シャーカーとは、整列・行進に始まり、ヨーガや武術、伝統スポーツの訓練、マントラや賛歌の斉唱、訓話や問答、対話などを行うもので、インド各地で毎日開かれるRSSの末端の活動である。このシャーカーについては〔中島2002a；2002b〕において詳しく論じた。

16) 「母なるインド」を意味する女神でRSSをはじめとしたサング・バリワールのシンボリック存在。

ワー・バーラティの活動地域には必然的にダリトが多く、彼らを活動に取り込む必要があるからであろう。近年、RSS の活動においても、アンベードカルの重要性が語られることが多く、ヒンドゥー・ナショナリストによるダリトの取込み運動には注目する必要がある。

この学校では、2002 年 11 月現在、5 つのクラスがあり、それぞれに 1 人ずつ先生がいる（すべて女性）。時間割とそれぞれの生徒数は以下の通りである。

- ・ 9：00～12：00 3～5 歳の幼児教育。生徒数は 20 人。
- ・ 12：00～14：00 子供を持つ母親への識字教育。生徒数は 13 人。年齢は 15～50 歳。
- ・ 14：30～17：00¹⁷⁾ 若い女性への裁縫教室。生徒数は 16 人。
- ・ 15：30～18：00 5～12 歳の初等教育。2 クラス同時並行で行われ、生徒数は両方合わせると 50 人。

この数字を合計すると、2002 年 11 月現在のこの学校の全生徒数は 99 人である。そのうち、12 歳以下の子供の生徒数は 70 人である。一方、このスラムの人口のおおよそ 3 分の 1 は、この 12 歳以下の子供で占められる。そのため、現在この学校に通っている子供は、このスラムの子供のうち、10 分の 1 にも満たないことになる。定員オーバーでこの学校に通うことができない子供たちは、授業の最中、学校の外でその様子を羨ましそうに眺めている。このスラムには一般の公立・私立の学校に通っている子供が約 100 人いるが、それを含めても、大半の子供が現在進行形で教育を受けることができない状況にある。そのため、この学校ではある程度の学力まで到達した生徒には、スラムの外的一般学校に通うことを勧め、その空いた枠で新たな生徒を受け入れようとしている。ちなみに、現在、一般の学校に通っている生徒の多くは、ここの学校で基礎教育を受け、公立・私立の学校に入学できた子供たちである。

さて、教室内の授業風景に目を移そう。まず、幼児教育と初等教育のクラスの生徒は、先生が学校に来ると、手を合わせ「ナマステ・ジー」と挨拶し、先生の足に触れるように教育されている。また、それぞれのクラスの始まりと終わりには、みんなで揃ってマントラの斉唱が行われる。特に初等教育のクラスの始まりにはそれが徹底されており、マントラの斉唱以外にもさまざまなことを行う。まず、はじめに、「バンデー・マータラム」の斉唱が行われ、続いて学問の神様であるサラスワティーをたたえるマントラ（「サラスワティー・バンドゥナー」）が唱えられる。次に神からの光明を詠う「ガヤトリー・マントラ」が斉唱され、「プレート・スマラン」といわれる祈りが行われる。この「プレート・スマラン」というのは、手を上向きに重ね（ちょうど手で水をすくう時の形に近い）、その手に向かって祈りを捧げるものである。ここでは、指にラクシュミー、手のひらにサラスワティー、手首にゴービンダが宿るとされ、

17) 3 時限目と 4 時限目の時間が重なっているのは 2 つのクラスが 1 つの部屋で同時に進められているからである。この時間、教室はすし詰め状態で、裁縫教室のミシンの音が響く中、子供たちは勉強に励んでいる。

それぞれに対するダルシャン（拝謁）が行われる。さらにその後で、食事の前に「ボージャン・マントラ」が斉唱され、聖音「オーム」が唱えられる。それに続いて心の平穏と世の中の平和を祈る「シャーンティ・パート」が唱えられ、インド国歌が斉唱される。そして最後に、ヒンドゥー・ナショナリズムのスローガンが叫ばれる。これは先生がシュプレヒコールをあげると、それに続いて生徒が声を合わせ、拳を振り上げてスローガンを叫ぶもので、なかにはかなり過激な文句も含まれる。それを以下に再現してみよう（なお先生を T、生徒を S と略記する）。

T: 「母なるインドに」

S: 「勝利を」

T: 「ラーム生誕の地に」

S: 「勝利を！」

T: 「母なる雌牛に」

S: 「勝利を！」

T: 「ラームのための仕事でないようなものは」

S: 「我々の仕事ではない！」

T: 「国の防衛は誰が行うのか」

S: 「我々が行うのだ！我々が行うのだ！」

T: 「国家が分断されようとしている」

S: 「ジャンムー・カシミールは我々のものだ！」

T: 「外国の要求は」

S: 「破壊のための罾だ」

T: 「市場に行って」

S: 「豊穡な自国のもの（スワデーシー）を手に入れよう！」

T: 「その穀物を」

S: 「我々は食べているのだ」

T: 「そこで布を手に入れて」

S: 「それを着よう！」

T: 「その知を手に入れて」

S: 「それを体得しよう！」

T: 「そことはインドのことだ」

S: 「国は我々のものだ！」

T: 「国の防衛は誰が行うのか」

S: 「我々が行うのだ！我々が行うのだ！」

T: 「母なるインドに」

S: 「勝利を！」

このようなスローガンを掲げた後、毎日ではないが、ヒンドゥーの賛歌を斉唱する時もある。これは始めから終わりまでおおよそ15分間で、最後に賛歌を斉唱する時は全部で20分以上かかる。

なお、母親への教育のクラスには3人のムスリムの女性がいる。彼女たちは、ヒンドゥーのマントラや賛歌の斉唱を、他のヒンドゥーと全く同じように行っている（ただし、このクラスではヒンドゥー・ナショナリズムのスローガンを叫ぶことはしない）。また、彼女たちが先生にする挨拶も、手を合わせ「ナマステ」というヒンドゥーの様式のものである。彼女たちは、このようなヒンドゥーの様式を受け入れることに対して、「個人的には問題がないが、（スラムの外のマスジッドの）イマームなどに知られると問題が生じる」という。この学校においては、ムスリムがヒンドゥーの様式を拒絶するのではなく、それを受け入れることによって、軋轢が生じないようにしているようである。

さて、この後、授業が始まるのであるが、初等教育と母親への教育のクラスでは、先生は黒板を使った一斉授業をほとんど行わず、個別授業を行っている。これは生徒の年齢やレベルがさまざまで、一斉授業を行うことが困難であるためである。生徒は先生から与えられた課題をこなし、それができれば前に座っている先生の所へそれを持って行き、指導を受ける。初等教育における科目はヒンディー語、英語、算数で、教科書はかつての生徒が使っていたものを使い回している。

裁縫のクラスも同様に個別授業で、初級の生徒は新聞紙を使って裁縫の練習をしている。なお、この学校にはミシンが2台あり、上達した生徒はこのミシンを使って実際に服を作っている。

一方、幼児教育のクラスでは、年齢やレベルがほぼ揃っているため、一斉授業が行われている。授業内容は、数を覚えたり、文字の読み書きを覚えたりといったもので、先生が読んだ文章や数字を生徒が声を揃えて復唱することがよく行われている。

また、授業では、ヒンディー語や算数の科目の他にも、さまざまな生活指導がなされる。たとえば、脱いだ履物をまっすぐに揃えることや、常に衣服などを清潔に保つべきことが特に強調され指導される。生徒が汚れた服を着てきた場合、先生はその生徒に、いったん家に帰って着替えてくることを命じる。そして、親が呼び出され、厳しく注意を受ける。他にも、親に対して子供の教育に責任を持つことが指導され、生徒が大幅に遅刻してきた際には、その生徒同様、その親も厳しく叱られる。なお、この学校では、親に対して子供を学校に通わせることへ

の責任感を持たせるために、月に 10 ルピー（1 ルピーは約 2.8 円）の授業料を親から取っている。このお金は、先生の収入になるのではなくすべて積み立てられ、お祭りの際などに生徒へのプレゼントを配ることなどによって還元される。2002 年 11 月 3 日に、この学校ではディーワリーを祝う行事が行われたが、その際、生徒全員に箱詰めのみターイー（甘いお菓子）が配られた。これは生徒から集めたお金で先生が買ってきたものである。

さて、以下ではこの学校の 5 人の先生の簡単な履歴等を紹介しよう。

①KT…幼児教育を担当

彼女は 1982 年に UP 州バレイリーに生まれ、1987 年ごろデリーに兄に連れられ出てきて、このスラムに住みついた。彼女の父の実家は農家で、現在でも母と長男とともにバレイリーの農村に住んでいる。兄は仕事をしながら、実家への仕送りをしている。彼女は、かつてのこの生徒で、この学校で勉強したのち、公立の学校に 15 歳まで通っていた。その公立の学校を卒業してから、この学校で幼児教育を担当するようになり、現在に至っている。

②SA…子供を持つ母親への識字教育を担当

彼女は 1954 年にハリアナ州パーニーパットという町に生まれ、1979 年にデリーに住む男性と結婚し、デリーに出てきた。彼女の実家は雑貨屋を営んでおり、結婚相手の男性もハリアナ州出身で、デリーで雑貨屋を営む家庭の息子である。彼女の夫は RSS の熱心なメンバーで、サング・パリワールの 1 つである「ヴィッディヤ・バーラティ」(Vidhya Bharati) という学校の事務職員である。彼女には娘が 3 人おり、全員がヴィッディヤ・バーラティの学校に通っていた（一番下の娘は現在も学校に通っている）。娘の 1 人は、現在、父の勧めでヴィッディヤ・バーラティの関係組織で仕事をしている。SA 自身の実家は、RSS とは全く関係がなく、この男性と結婚したことから RSS に共感を持つようになったという。彼女は 1989 年にこのスラムの学校が設立された当初から、ここの先生として活躍している。住まいはこのスラムから歩いて 3 分ほどのすぐ近所である。ここの学校で教える以外の時間は、家事をしている。

③US…裁縫のクラスを担当

彼女は 1959 年に UP 州スルターンプル農家に生まれ、その地で結婚し 4 人の子供を産んだ。村では夫は農業を営み、彼女は家計を支えるために縫製の仕事をしていた。しかし、農村での生活は経済的に苦しく、1993 年に一念発起し、デリーに住む親戚を頼って、夫・子供ともどもデリーに出てきた。住まいはこのスラムから歩いて 10 分ほどの場所にあり、現在、夫は住まいの近くの飲食店で働いている。デリーに出てきた当初、夫婦には子供を公立学校に行かせる金銭的な余裕がなかったため、友人から伝え聞いたこのスラムの学校に子供たちを通わせた。この学校に通っていた長女は、この学校で勉強したのち公立学校に通い、そこを 2000 年に卒業したのちは母を手伝い、この学校で裁縫教育の補佐をしている。現在は結婚相手を探

している最中で、家では家事の手伝いをしている。他に子供が3人いるが（男2人，女1人），彼らはまだ公立学校に通う学生である。

④SD…初等教育の担当

彼女は1972年にマッディヤ・プラデーシュ州ジャワプール市内のバラモンの家庭に生まれた。彼女の父はヒンドゥー寺院に併設された学校でサンスクリット語を教える先生で、ヒンドゥーの学識者（パンディット）である。彼女は13歳の時（1985年）に、バラモンの家系で12歳年上の男性と結婚し、デリーに出てきた。この結婚は幼少の時から決まっていたという。夫はRSSの有力なメンバーで、仕事もRSSの運営に関わることを行っている。この夫婦の住まいはデリー本部の敷地内にあり、生活そのものがRSSとともにあるといってもよい。この夫婦には息子が1人いるが、彼はRSS本部内で毎朝・毎夕行われるシャーカーのメンバーで、本部のすぐ近くにあるヴィッディヤ・バーラティの学校の生徒である。まさに筋金入りのRSS一家である。彼女は幼少の頃からサンスクリット語の先生である父にヒンドゥーのマントラや賛歌を叩き込まれたようで、現在でもそれらを誦んじて唱えることができる。彼女はこの能力を生かして、授業前に生徒達にマントラや賛歌を唱えさせている。また、彼女は1992年ごろからこの学校で教えはじめたといい、非常に活発な性格から、現在では5人の先生のリーダー的存在となっている。

⑤VN…初等教育の担当

彼女は1963年にハリアナ州パーニーパットの服屋の娘として生まれた。彼女は17歳の時（1980年）にデリーに住む男性と結婚し、デリーに出てきた。この男性は前妻を亡くしており、彼女は再婚の相手である。前妻との間に2人の子供がおり、さらに彼女との間にも2人の子供がいる。彼女は17歳で結婚したと同時に、7歳（男）と5歳（女）の子供の母親になり、さらにすぐに息子と娘を授かった。夫と前妻の間の子供2人は、現在結婚して家を出ており、実の子である2人の息子と娘も、実家に住んでいるもののそれぞれ機械技師と宝石店の店員として仕事をしている。住まいはこのスラムから歩いて10分ほどのところで、都市の一般的な庶民の家である。彼女の夫は、RSSのメンバーではなく、彼の兄が熱心なメンバーである。この学校で教えはじめたのは1995年ごろからであるが、そのきっかけは夫の兄が、子供が大きくなり、家事に余裕ができた彼女にこの学校の先生になることを勧めたからであるという。

このような5人の先生たちは、教室で教えるだけでなく、このスラムにおいてさまざまな健康・衛生活動を行っている。たとえば、政府が実施する健康診断や予防接種の登録を住民にさせるために一軒一軒、パンフレットを持って家を廻り、丁寧に説明をしている。また、政府が行っているICDS (Integrated Child Development Society) というプログラム¹⁸⁾への理解を呼びかけ、子供にポリオ（小児麻痺）の予防接種などを受けさせるよう勧めて廻っている。このポリオの

予防接種は、私の調査期間中の 2002 年 11 月 17 日（日曜日）、ICDS のメンバーがスラムにやってきて、この学校の教室で行われた。これには多くの乳幼児が連れてこられ、予防接種を受けていた。これらの政府の事業はすべて無料である。また、このスラムの脇に近年造られた公衆トイレも、彼女たちの政府への働きかけによってできた側面が大きいという。¹⁸⁾

ここで重要なのは、彼女たちの活動が政府の衛生・健康プログラムと密接に関わっているということである。スラムの住民たちにとって、このことは、無料で医療を受けることができるという利益以上に、政治権力から自分たちのスラムを守るという目的のために重要な意味を持っている。このことは次章で詳しく論じる。

また、彼女たちは月に 1 度程度開かれるセワー・バーラティの集団ミーティングに参加し、他の地域で活動する女性の活動家たちと情報交換や打合せを行っている。ここでは、さまざまな議題が挙げられ、活動の連帯が図られる。また、教育方針や活動方針の確認がなされ、セワー・バーラティ幹部による活動家への指導も行われている。

2.3 ダルマに生きる

前節で見たように、この学校の先生の経歴はさまざまである。しかし、彼女たちがこのような社会奉仕活動を行うにあたって、共通して抱いている思いがある。それは「自己の為すべき役割（＝ダルマ）を果たす」という思いである。

たとえば初等教育を担当する SD は、会話の中で頻繁に「ダルマ」という言葉を口にする。たとえばある時、彼女は次のように語った。

自分は父を非常に尊敬しています。その父から教わったことを社会に還元することが、バラモンである私にとってのダルマです。また、経済的に富める者が、貧しい者に対して手を差し伸べるのは、当然のダルマです。

彼女の中には、自分がバラモンの家庭に生まれ育ったということに対する誇りと、それを社会生活の中で生かさなければならないという強い義務感と情熱がある。そして、そのような思いが、父親から叩き込まれたサンスクリット語のマントラや賛歌を子供たちに伝えることを「自己の果たすべきダルマ」として捉える発想へとつながっている。また、都市のスラムという劣悪な環境の中で生きる低カーストの人たちに対して、金銭的にほとんど不自由のない生活

18) このプログラムについては [Kishore 1997 (2002)] が詳しい。

19) スラムの住民たちの語りによる。この公衆トイレが造られた経緯についてはさまざまな政治的背景があるようではっきりとしたことはわからないが、住民たちの間では、学校の先生たちの政府への働きかけと BJP（インド人民党）がデリーの政権を握ったことが関係づけられて捉えられている。ここでは、実際の公衆トイレ建設の経緯以上に、住民たちのこのような認識の方が重要であろう。

をすることができる自分が奉仕活動を行うのも当然の「ダルマ」であると捉えられている。

さらに、彼女は RSS の有力なメンバーである夫から強い影響を受け、ダリトをはじめとした低カーストの人たちへの差別意識を、バラモンの生まれである自分たちが具体的な行動を通じて解体していかなければならないと考えている。そのため、彼女は積極的にスラム内のダリトの家庭を訪ね、そこで食事をしたり、さまざまな相談にのったりしている。

彼女はある時、次のように語った。

リグ・ヴェーダでは、プルシャの口がバラモンとなり、両腕がクシャトリアとなり、両腿がヴァイシャとなり、両足がシュードラとなったことが謳われています。ここには差別など存在しません。大切なのはそれぞれのダルマです。両手・両足がなければ、体を自由に動かすことができないですし、頭が使えなければ両手・両足を動かすこともできません。私は、バラモンとして為すべきことを果たさなければなりません。そして、そこから差別を取り除かなければなりません。私の中にある差別意識を取り除くためにも、私はダリトの人の家を実際に訪ね、食事をするようにしています。

ここでは四姓の差異が、「ダルマ」における役割り原理として捉えられている一方で、それとカースト差別の問題は別であることが強調されている。これは RSS の公式理念と一致するもので [中島 2002a]、彼女はこのような理念を実践に移すべく、ダリトの人の家を訪問し食事をともにしている。彼女の語りの中では、RSS に所属するバラモンの高僧たちが、ダリトの村へ赴き食事をともにしたという話が頻繁に語られる。これも RSS のイデオログが美談としてよく語るもので、RSS が出版する書物にも、この種の話は頻繁に登場する。

しかし、ここで重要なのは、彼女がこのような話に影響を受け、日常の行為として実践しているという事実そのものである。そして、その行為を彼女が「バラモンとしてのダルマ」として捉えている点が重要である。次章で詳しく述べるが、このような彼女の行為は、スラムの中のダリトや低カーストの人たちから多大なる敬意を持って受け入れられている。カーストによる役割り原理に基づく有機的な関係性が形成されていた伝統的共同体とは大きく異なる都市社会において、彼女は RSS のメンバーである夫の影響を受けながら、新しいコンテキストでのダルマのあり方を模索しており、注目に値する。

このような SD の生き方に共鳴して、このセワー・バーラティの先生になったのが、幼児教育を担当する KT と裁縫のクラスを担当する US である。KT はこの学校で 1 年間、SD から教わったことがある。彼女はこの学校で学び、その後一般の公立学校に行くことができるようになったことに対して、強い感謝の念を持っている。それと同時に、低カースト出身である自分たちの家族に献身的に関わってくれた SD をはじめとした先生たちを、非常に尊敬している。

そして、彼女は自分が結婚するまでの間、その先生たちに対する恩返しと、その先生のような生き方を自分もしたいという思いから、この学校の幼児教育の先生をしているという。

一方、US は自分がデリーに出てきたばかりで、経済的に困っている状況の時に、この学校で子供の教育を行ってもらったことに対して、多大なる恩を感じているという。そして、生活に若干の余裕ができた今、何らかの形でその恩返しをしなければならないと思い、自分が得意である裁縫をこの学校で教えたい旨を申し出たという。彼女はある時、次のように語った。

私には、裁縫しか能がありません。文字も正しく書けないし、読むこともままなりません。そんな私が裁縫によって学校の役に立てることは、とても嬉しいことです。ここの先生に感謝しています。そして、神に感謝しています。

この US にしても、KT にしても、「ダルマ」という言葉は、彼女たちの語りの中に全く出てこない。しかし、彼女たちが「無給で教える」という社会奉仕をすることによって、社会の中における自己の役割を確認し、それに喜びを見出していることは確かである。彼女たちには、教育をすることによって他者をエンパワーし、そのことによって自己がエンパワーされているという自覚がある。さらに、このような喜びが与えられたことを、先生との関係性において捉えるだけでなく、神によって与えられた恩恵として捉えていることも重要である。彼女たちは「ダルマ」という概念を言語化された形では語らないものの、絶対レベルにおける神の超越性と相対レベルにおける人と人の関係性の認識を通じて自己の存在論的アイデンティティを感じ得ており、まさに「ダルマを生きる」存在として捉えることができる。

また、初等教育を担当する VN と、子供を持つ母親への識字教育を担当する SA は、両者とも子供が大きくなり家事に余裕ができた頃に「社会奉仕活動をしたい」という欲求が湧き、たまたまその時にスラムの先生をしないかという話が舞い込んできたために、この活動を始めたという。VN は夫の兄が RSS のメンバーであり、SA は夫がヴィッディヤ・バーラティで働く熱心な RSS のメンバーである。このような家庭環境の中で生活をするうちに、彼女たちはあるべきヒンドゥーの姿として社会奉仕をしなければならないと強く感じはじめたという。

ここで重要なことは、彼女たちが RSS のメンバーである夫や夫の兄から、ヒンドゥー・ナショナリズム的感化を受けながらも、政治運動にコミットするのではなく、「ヒンドゥーとして社会奉仕をしなければならない」という思いを強く持ちはじめたという点である。VN に、「最近 BJP とサング・パリワールの関係がよくないが、それについてどう思うか」という旨の質問をしたことがあるが、²⁰⁾ その時、彼女は驚いた顔をして「そうなのですか？」と、逆に私に問い返した。彼女にとって、国政レベルの政治の話は遠い存在であって、それに対しては興味も実感もほとんどない。彼女にとってのリアリティは、ヒンドゥー・ナショナリズムのイ

デオロギーや国政レベルの動きよりも、目の前のスラムの子供たちをどうするかという点にある。そして、その課題と取り組むことが、彼女にとっての役割と認識されている。また、スラムにいた時間以外は、彼女たちは一般の家庭の主婦である。彼女たちにとっては、家事をしつかりと行うことによって家族を支え、余裕のある時間にスラムの子供たちへの教育活動を行うという両方が、自己の果たすべき役割と捉えられている。

彼女たちも、明確な形で「ダルマ」という言葉を口にはしない。しかし、この都市社会という新しいコンテキストの中で、ヒンドゥーの精神をもとに新たな形で自己存在のあり方を追求していることは確かである。

ここに挙げた5人の先生の中で、自分で主体的にRSS関係の本などを読み、思想的に感化されたことによってこの活動を始めたという人は全くいない。SDとSAは結婚した夫がRSSのメンバーで、VNは夫の兄がRSSのメンバーであることから不可避免的にRSSと関わることになり、その過程でスラムの学校の先生になった。彼女たちの生まれ育った実家は、RSSとは全く関係がない。また、KTはこの学校で自身が学んだ関係から活動に参加するようになり、USは子供がこの学校で世話になった関係から活動に参加しはじめた。

SDは、前節で述べたように、授業の始まりにマントラの斉唱とともにヒンドゥー・ナショナリズムの過激なシュプレヒコールを叫ぶ。このシュプレヒコールを私がメモしていると、彼女はバツが悪そうに次のように言った。

このシュプレヒコールはセワー・バーラティのものであって、我々（私）のもの²¹⁾ではありません。

この時、彼女のいう「我々のもの」とは、前後の会話の文脈から考えて、明らかに彼女が父から習ってきたバラモンとしての教養と伝統のことを指している。彼女にとっては、ヒンドゥー・ナショナリズムの過激なスローガンは「我々のもの」ではない。彼女はここで、明確に（しかし非常にソフトな形で）ヒンドゥー・ナショナリズムのイデオロギーからの距離感を

20) この聞き取り調査を行っていた2002年11月には、アヨーディヤー問題をめぐるBJPとVHPの対立、テロ対策やカシミール問題をめぐるBJPとRSSの対立、経済開放政策をめぐるBJPとBMS (Bharat Mazdur Sangh: インド労働組合)・SJM (Swadeshi Jagaran Manch: スワデーシー覚醒組織)の対立が各種メディアで頻繁に取り上げられていたため、このような質問を行った。

21) ここで「我々（私）のもの」と表記したのは、彼女がヒンディー語で *hamārā* という単語を用いたためである。この単語は「私の」という一人称単数の所有格・所有代名詞である *merā* の複数形（つまり一人称複数の所有格・所有代名詞）であり、「我々の」「我々のもの」を意味するが、自己に対する敬意を込めて「私の」「私のもの」を表現する際、一人称単数の場合でも、この *hamārā* を用いることがよくある。ただし、この場合、この会話の前後の文脈から、彼女が一人称複数形である「我々のもの」という意味でこの語を用いた可能性のほうが高いため、このような表記を採った。

語っている。彼女にとって「ヒンドゥーの伝統」とは、生まれ育った実家で父から教えられたことであり、政治的主張を前面に押し出すヒンドゥー・ナショナリズムのイデオロギーそのものではない。彼女の中には、そのようなイデオロギーに対する言語化されない抵抗感があり、それは「正統なものではない」という意識が存在している。²²⁾

また、VN は先にも述べたように、調査当時、大きな問題になっていたサング・パリワールと BJP の対立を全く認識しておらず、RSS の政治的主張にはほとんど興味を示さない。そして、KT は現在の RSS の総裁の名前と顔を知らず、逆に BJP のライバル政党である国民会議派の総裁のソニア・ガンディーのファンであるという。さらに、US に至っては RSS が何の略かも知らず、RSS の創始者のヘドゲワールや、メンバーの間で絶大な敬意を集めているゴールワルカル（通称グルジー）についても、その名前すら知らない。

現実はこのような女性たちが、サング・パリワールの熱心な活動家であり、スラムの学校を支えている。ヒンドゥー・ナショナリズムの拡大やサング・パリワールのメンバーの増加現象を、「現代インドがヒンドゥー至上主義化している」と単純に議論することが、いかに無意味で、現実に対する認識を誤ることになるのかということが、この事例からはっきりとわかるであろう。末端レベルにおけるサング・パリワールのメンバーの増加現象は、このような個々人の主体を丁寧に探っていかなければ、的確に捉えることはできない。

3. 民衆のエージェンシーとヒンドゥー・ナショナリズム

3.1 ヒンドゥー・ナショナリズムを飼い慣らす

さて、話を学校の中から、それを取り巻くスラムの人たちの側に移すことにしよう。前にも述べたように、スラムの人にとっての最大の懸念は「政府によってこのスラムが壊されないかどうか」ということである。彼らは、あくまでも公共の土地に無断で家を建て住んでいる不法占拠者である。そのため、彼らは政府の都市整備事業が、近年、急速に進む状況を目の当たりにしながら、生活基盤を奪われることに対する強い不安を持ちつづけている。このような状況の中で、彼らは自分たちのスラムを守るべく、さまざまな策略を練っている。

80 年代末にセワー・バーラティの学校の設立をこのスラムの住民が受け入れたのは、子供たちに教育の機会を与えることができるという理由からだけではなく（むしろそれ以上に）、この「スラムを守る」という生活戦略が強く働いたようである。このスラムがある K 町とその周辺には、かつて多くのスラムが存在したが、90 年代後半になって再開発が進み、そのほとんどが政府によって壊された。このスラムの住民との間でそのことが話題になった際、この

22) ただし、先にも述べたように、彼女はヒンドゥー・ナショナリストのカースト批判に対して強い共感を抱いている。ここでは、ヒンドゥー・ナショナリズムを無批判に受け入れるわけでもなく、それに真っ向から反対するわけでもない、彼女のハイブリッドなエージェンシーに注目することが重要である。

スラムの自治会の代表的なメンバーの1人が、私に次のように語った。

この辺でセワー・バーラティの活動が行われているのは、このスラムだけです。他はセワー・バーラティが活動していなかったから、簡単につぶされたのです。

彼らは、セワー・バーラティが RSS を中心としたサング・パリワールの一機関で、中央政界の政権政党である BJP²³⁾ と密接に繋がっていることを強く意識している。また、警察官や行政機構の官僚の中に RSS の支持者が多くいることも熟知している。彼らにとって、セワー・バーラティの活動は、政治権力からスラムの存立を守る重要な安全弁なのである。また、そのような思いは、セワー・バーラティの活動家が、政府の健康・医療プログラムへの参加を呼びかけて廻っている姿や、その活動家への働きかけによって政府がスラムの脇に公衆トイレを建設したことを目にするることによって、さらに強くなっているようである。

彼らは、セワー・バーラティの活動家の背後に大きな政治権力の存在を透視し、それを巧みに飼い慣らすことによって、自分たちのスラムを守ろうとしている。これは、スラム内にある VHP のヒンドゥー寺院の存在についても同じことがいえる。ここの住民のほぼ全員が、この寺院と VHP のつながりを熟知しており、ここに常駐する僧侶が VHP のメンバーであることも住民の間では周知の事実である。

しかし、彼らは RSS・VHP・BJP に代表されるサング・パリワールだけを戦略的に取り込もうとしているのではない。それ以外にも、国民会議派や BSP (Bahujan Samaj Party: 大衆社会党)²⁴⁾ の演説会を定期的に呼び込み、それをスラムの広場で行わせることによって、さまざまな政治勢力とつながりを保とうとしている。私の調査期間中の 2002 年 11 月 11 日には、BSP の演説会が行われ、この政党の有力な政治家がやってきて立ち合い演説会が行われた。この日は BJP の支持者である住民も、積極的にこの演説会の舞台設営に協力していた。この演説会では、政治家の演説の時は全く盛り上がりを見せず、演説が終わった後に BSP 側が余興として行った音楽イベントが始まってから、大きな盛り上がりを見せた。彼らにとってこの演説会は、演説を聞くことに意義があるのではなく、演説会が開かれること自体に意味がある。そのため、彼らは「退屈な」政治演説の間は、周りの人間と世間話をして時間を潰し、「楽しい」

23) 2002 年 10 月から 12 月の調査時の政治情勢に基づく。

24) BSP は 1984 年、カンシー・ラームによって結成された SC (指定カースト) 中心の政党である。1980 年代後半から SC の間で支持を急速に広げ、1993 年の UP 州議会選挙では SP (Samajwadi Party: 社会主義党) と選挙協力を組み、圧勝した。それにより 1995 年 6 月 3 日から同年 10 月 17 日まで、SP とともに UP 州の連合政権を担った。2002 年 2 月の UP 州議会選挙においても票を伸ばし、BJP との連合政権を樹立した。現在 (2002 年 12 月) の UP 州首相は BSP のマヤワティーである。

音楽イベントになると興味を示しはじめる。

ここでは、スラムの住民の政治観に注目する必要がある。彼らの間では、「スラムを守る」ことが、全住民一致の共同課題であり、それを追求することが最優先されるため、地方の村落社会などでみられるような政党による利益誘導を伴う派閥争いが存在しない。むしろ、住民たちが協力し合って、さまざまな政党とのつながりを保つよう策略を練っている。また、それぞれの政党に対する茫漠としたイメージはあるものの、政策に関する理念については、ほとんどの住民が把握していない。ここでは政党の政治的イデオロギーは非常に無力である。

前章で述べたように、セワー・バーラティの学校の先生で、このスラムで育った KT は、BJP を含むサング・パリワールのメンバーでありながら、国民会議派の党首でイタリア出身の女性であるソニア・ガンディーの支持者である。彼女にとって、ソニア・ガンディーは女性でありながら政治の世界で活躍しており魅力があるという。

また、このスラムに住む元 RSS のシャーカーのメンバーである若者たちに政党支持を訊ねたところ、6 人中 5 人が国民会議派と答えた。その理由を訊ねたところ、彼らはニヤリとしながら「サービスがいいから」と答えた。私が「具体的にはどのようなサービスがいいのか」と訊ねると、横でその話を聞いていた別のスラム住民の中年男性が「お金だよ、お金」と口をはさんできた。彼らはそれを否定しなかった。つまり、彼らは選挙の際に、政党による票の買収行為に乗り、「ひと儲け」しているのである。

また、私と若者のやり取りを聞いていたこのスラムの自治会長の老人が、近くでトランプゲームに興じている人たちの輪を指差しながら、次のように言った。

政治はあの賭けトランプと同じなんだ。その時、楽しくて少しばかりの利益が舞い込んでくればそれでいいんだよ。

彼はここで、政治は「賭けトランプ」と同じゲームに過ぎないと語ることによって、それ自体には追求すべき何らの価値もないということを主張したいようである。さらに、上でみたように、政治権力は彼らにとって巧く飼い慣らし、利用する対象でしかなく、それ自体に目的を見出していない。また、上に挙げたシャーカーに参加する若者のように、RSS をはじめとしたサング・パリワールの活動に参加することと、BJP を支持することが一致せず、選挙の際にも、現金を多く配分してくる政党に投票するという者が多く見受けられることにも注目しなければならない。彼らは、RSS をはじめとしたサング・パリワールの末端活動に参加することを重要な価値を伴う行為であると捉えている一方で、政治に関する事象にはそのような価値を全く見出していないどころか、モラルよりも世俗的利益を優先すべき領域として認識している。このように、彼らにとって、それ自体は何の価値もないと認識されている政治の領域は、自分たち

のスラムを守るために巧く飼い慣らし、利用すべきものであり、宗教的倫理観よりも世俗的利益が優先される領域と認識されている。

しかし、ここで彼らのこのようなエージェンシーを、戦略的で狡猾な部分に限定すべきではない。彼らの中には、長年住んできたこのスラムに対する愛着があり、それにとまって生成されている「このスラムをよくしたい」という想いが強くある。そして、それが「よく生きたい」「正しく生きたい」という欲求へとつながっている側面が大いにある。

前章で触れたように、ここのスラムにはアンベードカルのモニュメントと無料宿泊所があり、双方とも、サムター・セーニク・ダルメンバーで、ここのスラムの住民であった CL という人物によって建てられた。彼は、一族でこのスラムの形成当初からここに居を構えていた古参のメンバーで、彼の兄は前述の通り、現在に至るまでこのスラムの自治会長である。彼は1956年にこのスラムに近いP町のダリトの家庭に生まれ、2001年に亡くなった。彼の父の仕事はゴミ集積場からの廃品回収とその分別で、彼も兄とともにその仕事を引き継いだという。彼はこのスラムに移ってきてからは花輪作りとその卸業をはじめ、まとまったお金を稼いだという。今現在でも、彼の妻や娘がその仕事を継いでおり、このスラムの中でその仕事を行っている。

彼は、このスラムの建設・整備を行う過程で社会活動に関心を抱き、知人の新仏教徒の活動家からアンベードカル思想を聞き、それに強く共感したという。そして、彼は、アンベードカル理念に基づき活動を行うサムター・セーニク・ダルメンバーになったという。この組織はダリトの解放のためにヒンドゥーの信仰を捨てて仏教徒に改宗することを活動の中心としているが、彼はここの熱心なメンバーであるにもかかわらず、仏教には改宗せず、ヒンドゥーであることを貫いた。彼が住んでいた家には今でも彼の遺族が住んでいるが、そこには他のスラム内の家よりも立派なヒンドゥーの祭壇があり、彼の写真が飾られている。彼の周辺の人によれば、「彼は新仏教運動に興味があったのではなく、今ここのスラムをいかによくするかということに関心があった人」であり、スラムの人々から「立派な社会活動家」と認識され、尊敬されていたという。今でもこのスラムには、彼に感化されてこのサムター・セーニク・ダルに入会したダリトの人が、大勢存在する。彼らは CL の遺志を継ぎ、彼が設立した無料の宿泊施設を運営している。その宿泊施設には仏教徒のシンボルである旗が掲げられているが、このスラムには仏教徒は1人も存在しない。

この CL は、セワー・バーラティが学校を造る際、それに積極的に賛成したという。また、実際に、彼は自分の息子や娘をこの学校に通わせていた。彼の家族は、この学校の先生と現在でも親しい付き合いをしており、また、彼の兄であるスラムの代表者や彼の弟は、学校を管理する RC と親密で友好的な人間関係を保っている。サムター・セーニク・ダルメンバーは、RSS を中心としたサング・パリワールを一様に「ダリトを抑圧するファナティックなブラフマ

ニズム（バラモン主義）」として強く批判し、²⁵⁾ それに対する抗議集会やデモを日常的に行っている。しかし、このスラムにおいては、両者は相互補完的な活動をしており、非常に友好的である。

このCLの周辺の人たちの間では「サマージ・サンガタン」(*samāj saṅghatan*:「社会統合」の意味)の重要性が頻繁に語られる。この「サマージ・サンガタン」という語は、RSSをはじめとするサング・パリワールでも重要視される概念で、かつ、サムター・セーニク・ダルのようなダリト解放運動・新仏教運動を進める団体においても重要視されている。

サング・パリワールにおいて、この「サマージ・サンガタン」という概念は、弱体化したヒンドゥーの再統合を図り、「ヒンドゥー・ラーシュトラ」(*Hindū Rāṣṭra*:「ヒンドゥー・ネイション」の意味)を築き上げようとするイデオロギーとして用いられる。具体的にはシャーカーなどの活動を中心にヒンドゥーの団結心を高め、その組織化を図っている。第2章でみたように、セワー・バーラティの活動もこの「サマージ・サンガタン」を実現し、国民統合を強化することを目的としている。

一方、ダリト解放運動・新仏教運動では、ヒンドゥーそのもののあり方を批判する概念としてこの「サマージ・サンガタン」という言葉が用いられている。彼らによれば、ヒンドゥーは6千を超えるジャーティ（カースト）によって分断されており、社会統合が為されておらず、そのためにダリトへの差別が根深く存在するという。²⁶⁾ 彼らはそのようなヒンドゥーのあり方に埋め込まれたカースト問題を解消するために、この「サマージ・サンガタン」という概念の重要性を提示している。彼らは前述のようにRSSを「ファナティックなブラフマニズム」として強く批判し、そのようなヒンドゥーのバラモン中心主義がインドの社会統合を阻害していると主張している。

このような「サマージ・サンガタン」という概念に関する双方の相反する捉え方の狭間で、スラムの住民たちは、それらとはまた違った捉え方でこの概念の重要性を強調する。彼らは、このスラム内の人々が団結し、権力からこのスラムの存立を守ることを大きな課題としている。さらに、劣悪な環境の中で手を取り合って助け合い、よき生活環境を整えていくことを目指している。そして、そのようなあり方を「サマージ・サンガタン」という概念で捉えている。

彼らは、RSSもサムター・セーニク・ダルも、ともに「サマージ・サンガタン」を重要視し

25) 著者が2002年11月14日にデリーのサムター・セーニク・ダルの事務所において行った聞き取り調査による。

26) サムター・セーニク・ダルの事務局長でダリト出身の仏教僧であるH. L. ラジョラへのインタビューに基づく(2002年11月14日、デリーにて)。なお、H. L. ラジョラはインド全国を廻り、仏教への改宗運動を行っている人物で、この組織の活動の中核を担う人物である。

ていて素晴らしいと一様に語る。しかし、彼らの間では、ヒンドゥー・ナショナリストが「ヒンドゥー・ラーシュトラ」を構築するためのイデオロギーとして用いている側面や、新仏教徒たちが反ブラフマニズムというイデオロギーとして用いている側面は共有されていない。彼らは自分たちのスラムの存立を守り、さらによき町にするためにスラム内の人々の結束を高めなければならないという思いを表現するために、ヒンドゥー・ナショナリストや新仏教徒たちのイデオロギーを巧みに流用しているといえる。ここでは、彼らのエージェンシーが、個人主義的なものではなく、住民の連帯という共同性と密接不可分である点も重要である。²⁷⁾

さらに、このような彼らのエージェンシーは、このスラムの呼称に関しても発揮されている。このスラムには行政上の町名は存在せず、スラムの前にあるバス停の番号で表示される。そのため、たとえば、このスラム内にあるセワー・バーラティの学校に郵便物を送る際の宛先は「K 町〇〇番バス停」となり、形式上、バス停に郵便物を送る形となっている。つまりこの町は、行政上「存在しない町」なのである。このようななかで、このスラムの住民たちは、CL の活動を称え、自分たちのスラムを「アンベードカル・ナガル」(Anbedkar Nagar) もしくは「アンベードカル・バ스티」(Anbedkar Basti) と名づけ、そう呼んでいる。この町の名前は、このスラムの住民に浸透しているだけではなく、周辺の町でもかなり浸透しており、サイクルリキシャーの運転手にこの名前を告げれば、このスラムに到着することができる。彼らは、自分たちの町を独自に名づけ、それを浸透させることによって、「存在しない町」を存在させようとしている。そして、それは「自分たちはここに存在する」という彼らの存在証明の声そのものなのである。ここに、彼らのエージェンシーとともに、権力に対するソフトな形での抵抗をみることができよう。

しかし、何度も強調するように、この彼らのエージェンシーは、単なる狡猾な生活戦略や権力への抵抗としてのみ発揮されているのではない。彼らの間には「よき社会」への志向性とともに、存在論的問いから生じる信仰のモメントが強く存在する。そして、そのような志向性は、CL の活動だけでなく、セワー・バーラティの学校の先生たちの活動によっても強化され、高揚してきているといえる。次節では、この学校の先生とスラムの住民の具体的な関係をみてみることにしよう。

3.2 共鳴するダルマ

このスラムの住民たちは、(私の調査の範囲内では) 例外なく、セワー・バーラティの学校の先生たちに尊敬と感謝の念を抱いている。彼らは、この先生たちが無報酬で毎日この学校で教えていることをよく知っており、そのことを高く評価している。また、子供を持つ親の多

27) エージェンシーの共同性については [田中 2002] を参照のこと。

くは、学校が創設されてからの13年の間（1989～2002年）に、実際に子供の教育をみてもらった経験をもっており、その点で強い恩義を感じている。また、住民たちは、彼女たちがこのスラムの健康・衛生活動を行い、政府の無料の身体検診や予防接種を受けることができるようになったことについても、強い感謝の念を抱いている。

そして、そのような思いは、先生たちの中で最も献身的でアクティブな活動を行っているSDに対して、特に強く向けられている。前にも述べたように、SDは、頻繁にこのスラム内の家庭を訪問して廻り、住民たちとの具体的な人間関係を構築している。彼女は複雑に入り組んだスラム内の道を熟知しており、どこにどの子供が住んでいて、そこが何人家族なのかというような情報もしっかりと記憶している。また、彼女がバラモンの家系の人で、そのような人がダリトの家を訪問し、食事をしているということも、多くの住民が知っている。

このような先生に対する住民の思いは、スラムの中で、先生（特にSD）とすれ違った時に、彼らの側が示す態度によく表れている。ここの住民の多くは、彼女たち²⁸⁾と出会ったときには、手を合わせ「ナマスカル」と挨拶する。このような丁寧な挨拶は、通常、住民同士の間ではほとんど為されない。また、子供をこの学校に通わせる母親の多くは、彼女の足に触れ敬意を示す。当然のことながら、このような挨拶がなされている場面を、住民の多くが目当たりしている。さらに、幾人かのダリトの女性は、座っているSDの履物を脱がせ、地面にしゃがみ込み、彼女の足に直に自分の額をつけ挨拶をする。このダリトの女性の1人は、子供の教育をSDに見てもらい、さらに家庭訪問を頻繁に受け、さまざまな相談にのってもらい、非常に感謝していると語った。

このような先生たちと住民との関係が構築されるなかで、住民の中からこの先生たちの献身的な姿に心を動かされ、自己のあるべき姿を問い直し始めた者が大勢出てきている。

子供を学校に通わせるあるダリトの男性は、この先生の献身的な姿を日常的に目の当たりにし、さらに家庭訪問を受け、親身になって話を聞いてもらったことで改心し、お酒を飲むことを一切やめ、仕事をまじめにするようになったという。また、花輪作りに従事するある女性は、その作業中、1つの花に糸を通すごとに「ラーム」と唱えるようになったという。さらに、SDに感化されたことにより、このスラム内の多くの家庭で、食事の前に「ボージャン・マントラ」（食事のマントラ）を唱えるようになったという。

ここでは、スラムという空間に住むサバルタンのヒンドゥー復興的主体のあり方に注目する必要がある。彼らの行為は、多くの場合、都市の上層・中間層がするような、寺院に寄進した

28) ここでの「彼女たち」には、スラム内で育ち先生になったKTや、もともと生徒の親で最近になって裁縫のクラスの生徒を指導することになったUSは含まれない。住民たちは彼女たちに対して、「ソトからやってくる先生ではなく、自分たちと同じ境遇の仲間である」という認識をもっているようである。

り、社会奉仕活動に参加するようになったりという明確で社会的に目立つ形でのヒンドゥー復興の姿をとらない。また、彼らは、自己を客体化して捉えることのできる上層・中間層の人々のように、自分たちのヒンドゥー復興的状况を雄弁に語ることもしない。しかし、彼らは、スラムという悪い生活環境の中で、これまで以上に仕事に励み、子供を育て、家族を養っていくことによって、現在の自己にとっての所与の関係を精一杯引き受け、そのギリギリの生活のなかで、神を思いながら、自己のあるべき姿を問うている。そこにはよきヒンドゥーとしての生きる道を懸命に模索する彼らなりのヒンドゥー復興が存在する。

セワー・バーラティの先生たちの活動は、上でみたように、住民たちのヒンドゥー覚醒やヒンドゥー復興の火つけ役となっている。それは、都市開発が進み整備が急速に進む首都デリーのなかで周縁化されたスラムの人たちの生活世界を、新たな形で活性化させることとなっている。このスラムという空間から立ち上がる公共圏においては、さまざまなエージェンシーが絡まり合いながらも、「自己は如何にあるべきか」という存在論的問いと「よきこと」を信仰の側面から希求する心性が芽生え、都市の上層・中間層によって構成される社会や、共同体的紐帯が強い伝統社会とは異なった形のヒンドゥー復興が起こっている。

3.3 ヒンドゥー復興とヒンドゥー・ナショナリズムの狭間

しかし、このようなスラムにおけるヒンドゥー復興的状况を手放しで評価するわけにはいかない。そこにはアイデンティティ・ポリティクスとしてのヒンドゥー・ナショナリズム的状况も同時に起こり、深刻な問題が出てきていることも指摘しなければならない。

まず、端的に指摘することができる問題は、セワー・バーラティの活動によって、このスラムの住民の多くが、サング・パリワールのイベントやデモ、政治集会に動員され、ヒンドゥー・ナショナリズム勢力の拡大化をサポートしている点である。ここの住民たちは、デモに参加すると、サング・パリワールの幹部によって準備されたプラカードを手にもち、横断幕を掲げ、シュプレヒコールを叫ぶ。また、VHP などの政治集会に大挙参加することによって、ヒンドゥー・ナショナリズム運動が各地で盛り上がり、高揚している様子を作り上げることに荷担している。ここの住民の多くは、2002 年 1 月 27 日にデリーで行われた VHP のアヨーディヤー問題に関する大集会に聴衆として参加したのであるが、この集会にはインド各地から動員されたサング・パリワールのメンバーが集結し、5 万人を超える人で溢れかえった会場の様子がテレビ・新聞をはじめとしたマスメディアでも大きく報道された。これがひとつの大きなきっかけとなって、アヨーディヤー問題に本格的に火がつき、政治的大問題に発展したことは記憶に新しい [中島 2002a]。このスラムの住民が、2002 年 2 月から 3 月にかけて政治問題化したアヨーディヤー問題の盛り上がりの片棒を担いでいるという事実は否めない。

また、このスラムへのヒンドゥー・ナショナリズムの流入は、部分的にはあるがスラム内の人々のコミユナルな意識を高めることに繋がっている。前章で紹介したように、セワー・

バーラティの学校では、授業の始まりの際に、ヒンドゥー・ナショナリズムに基づく過激なシュプレヒコールが叫ばれる。当然、毎日、このシュプレヒコールを叫んでいる子供たちは、その言葉を暗誦し、子供同士で遊んでいる時や家に帰って雑談をしている時にも、そのシュプレヒコールを叫んだりする。また、この学校から聞こえてくるその声を、スラム内の多くの大人たちが日常的に耳にしている。さらに、教室内にはヒンドゥー・ナショナリズムのイデオロギーを浸透させるための標語がいたるところに記されており、それを子供たちは毎日、繰り返し繰り返し目にしている。動員されて参加したイベントや集会では、長時間にわたってヒンドゥー・ナショナリズムに基づく演説を聞かされ、デモに参加した際には、ヒンドゥー・ナショナリズム的シュプレヒコールを声に出して叫ぶ。

このスラムの住民たちは、前節でみたように、セワー・バーラティの献身的な活動を日常的に目にしており、その団体と密接なつながりを持つサング・パリワールの諸団体に対して非常に好意的な思いを抱いている。また、その活動に対する信頼は非常に厚い。このような背景のもとで、ヒンドゥー・ナショナリズムが内包するムスリムやクリスチャンに対する敵愾心が住民のなかに自然に、そして確実に刷り込まれ浸透していつている。

ヒンドゥーの住民たちは、日常の会話の中で、ムスリムに対して、強い不信感を露わにすることがある。たとえば、あるヒンドゥーの住民は次のように語った。

イスラームは他の宗教を認めません。イスラームはシャーンティ²⁹⁾ではありません。ジハードという名のもとにテロを行っています。ムスリムはシャーンティではないから（ムスリム住民が多かった）隣町のスラムは取り壊されたのです。ムスリムが多く住むスラムはテロリストの隠れ家になっているので危険です（カッコ内の補足文は著者による）。

イスラームは他の宗教を認めず、さらにジハードの名のもとにテロを行っているという語りは、RSSをはじめとしたヒンドゥー・ナショナリストが、最近頻繁に主張しているものそのもので、ここでは、彼がこのようなヒンドゥー・ナショナリストの主張から影響を受けていることを明確にみてとることができる。また、隣町のスラムが壊されたという話は、2002年6月にすぐ隣のM町のスラムが行政によって取り壊されたことをいつている。このスラムが取り

29)「平和」を意味する語。ただし、この語は日本語の「平和」や英語の peace の概念とは異なり、国家間や社会的な争いのない状態だけを指すのではなく、個々人の「心の平穏」の意味をも内包した概念である。ここで「イスラームはシャーンティではない」と言ったとき、これは昨今のイスラーム過激派によるテロリズムだけを指しているのではなく、イスラームは個々人の「心の平穏」をも欠いた好戦的宗教であるというニュアンスが強い。

壊されたことに関しては、住民の間で彼が語ったような「ムスリムが多く住んでいたので壊された」という認識が共有されている。

このような認識は、2001年12月13日に起きた国会襲撃テロ事件の経緯と密接に関わっている。この事件は、ムスリムの過激派テロリストがデリーにある国会議事堂に進入し、警備にあたっていた警官9人が殺され、犯人の側も1人が自爆死し、4人が射殺されたという事件で、インド内外で大きなニュースとなったが、この事件の報道の中で、この犯人たちが事件を起こす直前までこのスラムのあるK町に潜んでいたと伝えられたことから、住民たちの不安とムスリムに対する疑心暗鬼が強化された。この事件以降、このスラムには警官らしき人物の出入りが多くなったと住民たちは語る。

このような事件の約半年後に、隣町のムスリムが多く住むスラムが行政によって壊されたことから、「ムスリムがいる地域はテロリストが潜んでいる可能性が高く、そのために隣町のスラムは壊された」という認識が強く共有されることとなった。

このような形で、このスラムにおいてはヒンドゥーとムスリムの間のコミュニカルな問題が、部分的にはあるが徐々に生じつつある。そして、その背景にはヒンドゥー・ナショナリズムの流入があることは疑えない。

以上みてきたように、このスラムにおいては、ヒンドゥー・ナショナリズムの活動をめぐってさまざまな社会変化が生じ、新たな形の公共性が構築されてきている。このスラムの住民は、上層・中間層のようなエリートたちとは異なり、自らの宗教復興的状況やヒンドゥー・ナショナリズムへの距離感などを明確にかつ論理的に語ることはない。しかし、彼らの語りや行為の中には、スラムをよくしたいという思いや、自分自身がさまざまな関係性や共同性を引き受けながら「よく生きること」や「正しく生きること」を追求するエージェンシーが存在する。そこでは、文字化された言語を駆使し論理的思考を表現することのできるエリートが担う公共性とは大きく異なるサバルタンの公共性が構成されている。

サバルタンの公共性は、さまざまな矛盾を内包している。彼らはイデオロギーを巧みに流用し飼い慣らそうとする一方で、特定のアイデンティティ・ポリティクスの社会運動を積極的にサポートする。日常生活の中で、さまざまな関係性や共同性を引き受け、そのなかから「よく生きること」や「正しく生きること」を懸命に模索する姿をみせる一方で、ムスリムに対する排他的言説を流布させている。このような矛盾する民衆のエージェンシーのなかから、彼らが新たに構築しつつある公共性をみつめることが、ヒンドゥー・ナショナリズムの拡大という現代インドの大問題を考えるうえで、非常に重要である。ヒンドゥー・ナショナリズム運動は、現代インドの複雑な情勢のなかで、さまざまな主体の重層的な絡まりを通じて拡大化しているのである。

お わ り に

本稿においては、サング・パリワールの一翼であるセワー・バーラティのスラム街での活動に注目し、そこにおける活動家と住民のインタラクションのなかから、公共圏を活性化させる動きとコミュニナリズム的意識の醸成という問題の両側面が生じていることをみてきた。

都市のスラム街の住民にとっての最大の関心事は、自分の住むスラムが行政によって壊されないかどうかということである。彼らはその意識にしたがって、ヒンドゥー・ナショナリズムの勢力やさまざまな政治勢力を飼い慣らそうとする。特に、BJP という政権与党が背景に存在するセワー・バーラティに対しては、スラムの存立の安全弁として捉えている住民が多い。彼らはスラムという共同体を守るという生活戦略の中で、ヒンドゥー・ナショナリズムや新仏教運動などの政治的イデオロギーを巧みに流用し、さらに行政上名前のない自分たちのスラム街に独自の名前をつけることによって、自分たちの存在証明を行っている。そこに、彼らのソフトな形での権力への抵抗とエージェンシーをみることは重要である。

しかし、このようなスラムの住民の生活戦略の側面のみをエージェンシーとして捉えることは、彼らの主体を包括的に捉えたことにはならない。彼らの日常の中には、存在論的問いから発した「よく生きたい」という価値追求の側面が存在する。そして、このような意識は、スラムの住民とセワー・バーラティの活動家たちの相互的なインタラクションのなかで生まれていることに注目しなければならない。

本稿で取り上げた調査地におけるセワー・バーラティの学校の先生たちは、日常はごく普通の主婦で、家事の空き時間を利用してボランティアワークに従事している。彼女たちにとっては、ヒンドゥー・ナショナリズムのイデオロギーを末端に浸透させることが重要なのではなく、自己がヒンドゥー的ダルマに従って如何に生きていくべきかという存在論的問いそのものが重要であり、そのようなダルマの意識から活動に従事している。そのため、彼女たちにとっては、スラムの子供たちやその親たちとの関係を築き、そのなかでさまざまなケアを行うことによって住民たちをエンパワーし、それによって自己がエンパワーされること自体が重要になる。

また、スラムの住民たちは、そのような活動家たちが「ダルマに生きよう」として献身的に奉仕する姿に感化され、自己存在のあり方を問い直している。スラムの住民たちは、都市の上層・中間層が寺院に喜捨をしたり、社会奉仕活動に参加するようになったりというような明確な形でのヒンドゥー復興の姿をとることもなく、また、ヒンドゥー復興的状况を雄弁に語ることもしない。しかし、彼らは、スラムという悪い生活環境の中で、これまで以上に仕事に励み、子供を育て、家族を養っていくことによって「現在の自己にとっての所与の関係性」を精一杯引き受け、そのギリギリの生活の中で、神を想いながら、自己のあるべき姿を問うてい

る。そこにはよきヒンドゥーとしての生きる道を懸命に模索する彼らなりのヒンドゥー復興が存在する。

しかし、セワー・バーラティの活動はあくまでもヒンドゥー・ナショナリズムに基づいたものであり、その問題が表面化しつつある。スラムの住民たちは、セワー・バーラティの活動を通じてサング・パリワールのデモや政治集会に動員されるようになり、それによって、ヒンドゥー・ナショナリズム運動を盛り上げることに荷担している。また、そのようなことを通じてヒンドゥー・ナショナリズムのイデオロギーがスラムの住民たちの間に浸透していき、ムスリムに対する不信感や敵対意識が徐々に高揚してきている。

以上みてきたように、スラムの住民たちは、ヒンドゥー・ナショナリズムを時には飼い慣らし、そのイデオロギーを巧妙に流用する一方で、デモや政治集会に参加することによって、その運動を根底で大きく支える主体となっている。また、セワー・バーラティの活動家たちとのインタラクションのなかから、ヒンドゥー復興的な価値の創出や、ヒンドゥー・ナショナリズムに基づく他者排除の心性を構成していつている。さらに、セワー・バーラティの末端の活動家たちも、RSSの公式的なイデオロギーを末端に浸透させる役割りを組織内では担っていないながらも、それに対する距離感や無関心をさりげなく語る。

このような矛盾に満ちた言説や行為の重なりの中で、サバルタンの公共性は構成されている。そこでは、エリートのような一貫した論理はなく、状況に応じて身をかわしながら生きてゆく彼らの生活戦術が存在する。そして、そこには単なる狡猾な戦略だけではない、新たな価値の創出がみられる。その価値は、単に上から与えられたものや、伝統的な社会秩序をそのまま踏襲したものではなく、新たな状況とさまざまな関係性のなかから複雑で重層的な絡まりを通じて創造されるものである。このようなサバルタンの公共性に注目し、その場所で繰り広げられるヒンドゥー・ナショナリズム運動を具体的にみなければ、ヒンドゥー・ナショナリズムの拡大化現象を包括的に捉えることはできない。

これまでのヒンドゥー・ナショナリズム研究においては、イデオログの言説に注目したものがほとんどで、末端の活動家と住民のインタラクションに注目した研究は皆無に等しい。しかし、本稿で示したように、現代インドにおけるヒンドゥー・ナショナリズムの拡大化を問題とする際、トップイデオログの言説やパンフレット類に示される公式的な活動目的とは大きく異なった現実が存在している。そこでは、イデオログたちとは大きく異なる末端の活動家たちの主体が存在し、その活動家と一般の住民たちとの日常的関係のなかで、運動が展開している。

ある政治運動を検討する際、出版物やパンフレット類、政治家やイデオログへのインタビューなどからその運動の特性を明らかにし、議論を展開することが主流である。これまでのヒンドゥー・ナショナリズム研究においても、そのような研究の潮流は顕著にみられる。しか

し、そのような「文字化されたもの」だけを研究の俎上にのせていては、運動の拡大の原因を捉えることができない。そこでは、末端の活動の現場におけるさまざまな（そして微細な）声に耳を傾け、活動家や住民たちのエージェンシーをみつめなければならない。末端の現場では、公式的なイデオロギーも、さまざまなコンテクストにおかれることによって変化し、流用されている。このような末端の現場におけるさまざまな現象に注目することによって、ある政治運動の立体的な姿がようやく浮かび上がってくる。本稿は、そのような関心に基づいて、現代インドにおけるヒンドゥー・ナショナリズム運動を捉えようとした試みである。

引用文献

- 足立 明. 2001. 「開発の人類学—アクター・ネットワーク論の可能性」『社会人類学年報』27.
- 栗屋利江. 2002. 「南アジアにおける『公共圏』・『市民社会』をめぐる研究動向」『南アジア研究』14.
- 上田閑照. 2000. 『私とは何か』岩波新書. 岩波書店.
- 落合仁司. 2001. 『ギリシア正教 無限の神』講談社現代メチエ. 講談社.
- 田中雅一. 2002. 「主体からエージェントのコミュニティへ—日常実践への視角—」田辺繁治・松田素二編『日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社.
- 田辺明生. 1997. 「共生のしくみ—ケルダ王国マントリ城塞の事例から」木村靖二・上田 信編『地域の世界 10 人と人の地域史』山川出版社.
- . 2001. 「比較存在論のために」『アジア・アフリカ地域研究』1.
- 中島岳志. 2002a. 『ヒンドゥー・ナショナリズム—印パ緊張の背景』中公新書ラクレ. 中央公論新社.
- . 2002b. 「ヒンドゥー・ナショナリズム運動における身体のポリティクス—RSS（民族奉仕団）のシャーカ活動をめぐって」『宗教と社会』8.
- ハーバーマス, ユルゲン. 1973 (1994). 『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探求』細谷貞雄・山田正行訳, 未来社.
- ペラー, ロバート・N. 1991. 『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』島蘭 進・中村圭志訳, みすず書房.
- Chatterjee, Partha. 1993. *The Nation and Its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories*. Princeton: Princeton University Press.
- Kishore, J. 1997 (2002). *National Health Programmes of India: National Policies and Legislations Related to Health*. New Delhi: Century Publications.
- Tanabe Akio. 2002. Moral Society, Political Society and Civil Society in Post-colonial India: A View from Orissan Locality, *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, 14. (『南アジア研究』第14号)
- Sewa Bharti. 2000a. *Sewa Bharti: Delhi*. New Delhi: Sewa Bharti (Regd). (pamphlet in English)
- . 2000b. *Sewā Bhārati: Delhi*. New Delhi: Sewā Bhārati-Delhi. (pamphlet in Hindi)
- . 2002. *Nār Sewā NārāyaṇSewā: Vārṣik Kāryavrat*. New Delhi: Sewā Bhārati.